2009.1.12.

サロン2002公開シンポジウムのご案内

地域からみたJリーグ百年構想

ー　地域に見る熱きムーブメントを語るー

　サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする異業種ネットワーク「サロン 2002」は、2001 年度より毎年度、公開シンポジウムを開催しております。
　これまでのシンポジウムでは、「2002 年 FIFA ワールドカップ」「地域スポーツの振興」「toto」を取り上げ、2005 年度はデットマール・クラマーさんをお招きして「クラマーさんありがとう」を、2006 年度は育成環境、ゲーム分析、観戦文化の観点から 2006FIFA ワールドカップ・ドイツ大会の回顧を行いました。
昨年度は「みるスポーツ」としてのサッカーをスタジアムでのライブ観戦を取り上げました。

今年は「地域からみたJリーグ百年構想」をテーマに、地域で起きている熱いムーブメントを取り上げたいと思います。このシンポジウムで多くの方と、地域スポーツの熱い現状と未来について語り合えることを楽しみにしています。

記

主　催　：　サロン2002
後　援　：　調整中
日　時　：　2009（平成21）年1月31日（土）　13：30～16：30　（受付13：00～）
会　場　：　日本青年館　ー　502号会議室　ー
　　〒160-0013　東京都新宿区霞ヶ丘町7番1号　／　電話03-3401-0101
演　者　：　守屋　実　（FC町田ゼルビア代表）…「2011年Jリーグ昇格を目指して！」
　　宇都宮徹壱　（写真家/ノンフィクションライター）…「地域リーグから見えるJリーグ拡大の現状と是非」
　　宮明　透　（大分工業高等専門学校）…　ナビスコ決勝「大分の変貌とその過程」
コーディネーター：　中塚義実　（サロン2002理事長／筑波大学附属高等学校）
参加申込　：　※どなたでも参加できます
　　氏名、所属(差し支えなければ)、連絡先(TEL/Email)、懇親会（参加・不参加）を明記の上、
　　salon2002@j-sps.com　までEmailにてお申し込み下さい。
参加費　：　1000円。（但し、学生・院生は無料）
事務局　：　高田敏志、麻生征宏

注）「賛助金」のお願い
　本シンポジウムの報告書を、趣旨に賛同してくださる個人または団体からの「賛助金」で作成いたします。「賛助金」は一口5,000円とし、拠出していただいた方のお名前を報告書に掲載させていただくことで、賛助の気持ちに応えたいと思います。さらに、4口（2万円）以上の「賛助金」をいただいた個人や団体には、報告書への広告掲載も可能とさせていただきます。大きさの目安は以下の通りです。
　A4版1ページ(表紙裏、裏表紙裏)…5万円以上
　A4版1ページ(その他のページ)　…5万円
　A4版1／2ページ　　3万円
　A4版1／3ページ　　2万円
　「賛助金」をお出しいただける個人または団体は、事務局へご連絡いただいた上で、下記口座へお振込みください。
　　口座　：　みずほ銀行板橋支店　普通　2076207　サロン2002プロジェクト代表　中塚義実

参考：サロン2002とは何か

「サロン2002」は、以下の設立宣言に賛同する「同志」によるゆるやかなネットワーク組織です。

サロン2002設立宣言

（2000年4月1日）

我々は、以下に「サロン2002の“歴史”」、「サロン2002の“志”」及び「サロン2002の“会員”」を述べることにより、ここにあらためてサロン2002の設立を宣言する。

【サロン2002の“歴史”】

サロン2002は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社心グループ」（財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980年代後半からこの名称で活動）を前身とし、1997年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン2002」として活動を行ってきた。

【サロン2002の“志”】

サロン2002は、サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン2002の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン2002の“志”を実現する上で、2002年FIFAワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン2002の“会員”】

サロン2002は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン2002の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン2002からの“Take”を求めるだけでなく、サロン2002に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン2002は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

2008年度の会員は現時点で約130名。全国各地にいる会員は、小・中・高・大の学校関係者、Jクラブ・地域クラブの関係者、フットサルや草サッカーの関係者、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどのメディア関係者、サポーターやボランティア、サッカー以外の競技の関係者など多様です。国や地方自治体のスポーツ行政に携わる者や、JFA、各都道府県FA関係者もいます。様々な形でサッカー・スポーツにかかわりながら、“志”を実現させようと活動する者で構成されているのが「サロン2002」です。

「サロン2002」の主たる活動は、月例会の開催と、その内容を核とするホームページの運営です。本シンポジウムは公開型月例会として毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しております。

サロン2002の詳細は、ホームページ ＜http://www.salon2002.net＞ でご確認ください。

コーディネーター挨拶

中塚義実（サロン 2002 理事長）

こんにちは。年に 1 度のサロン 2002 公開シンポジウムに、ようこそお越しくださいました。都内はもとより、遠くは中国北京市から、わざわざこのために（!?）駆けつけてこられた方もおられます。ありがとうございます。

お手元に、ホッチキス留めの「地域からみた J リーグ百年構想」という資料があると思います。最初に、主催者であるサロン 2002 とは何かということ、今回のシンポジウムの位置付け、そして本日の進行について、コーディネーターとして簡単にご紹介させていただきます。

ホッチキス留めの一番裏に、サロン 2002 とは何かという 1 枚紙が付いていると思います。もともと 1980 年代に、日本サッカー協会科学研究委員会に、社会学や心理学に携わるメンバーの研究グループがありました。そこが前身です。1990 年代に入り、2002 年 FIFA ワールドカップの招致活動や J リーグ発足の盛り上がりがあり、その研究会に様々な分野の人たちが集まるようになりました。そして、単なる研究会ではなく、2002 年をターゲットに据えてもっと幅広い活動をしていこうではないかということでリスタートしたのがサロン 2002 です。いまは会員制の組織として、全国に 130～140 名の、熱き志を持った同志が、通常はネット上でつながっています。そしてときどきこういうような会で、ネット上でしかやり取りをしたことがなかった人たちがリアルに顔を合わせる機会を設けています。

メインの活動は月 1 回の月例会ですが、ときどき地方に出掛けてサロンを開催したり、今回のような公開型のシンポジウムを開いて多くの方と交流する機会を設けています。

公開シンポジウムでは、毎回様々なテーマを取り上げています。昨年度は、J リーグができて 15 年経ったところで「サッカー観戦を楽しもうースタジアム編」と題して、みるスポーツとしてのサッカーを取り上げました。ようやく昨年度の報告書が、きょう完成しました（!?）。まだ届いていませんが、シンポジウムが終わるころまでにはこの会場に届くはずです（汗）。

今回は、J リーグ百年構想が地域社会に何をもたらし、どのような変化が起きているのかを、「地域からみたJリーグ百年構想－地域に見る熱きムーブメントを語る」と題して取り上げることにしました。テーマ設定の直接のきっかけは、きょうの演者でもある宇都宮徹壱さんの著書、『股旅フットボール』です。ここで取り上げられている、地域リーグと J F L の周辺にみられる、各地域におけるさまざまな動きを取り上げ、地域に固有の、あるいは全体に共通する問題点や可能性を出し合う場にできればと考えました。

3 名の演者をご紹介します。まず、先ほどもご紹介した『股旅フットボール』の著者で、もとはヨーロッパの「辺境」の取材をされていましたが、いまは日本の地域リーグ、特に

ＪＦＬに上がるようなところの取材を続けていらっしゃる宇都宮徹壱さんです（拍手）。

昨年ナビスコカップで優勝したことによる大分の盛り上がりは、ここにおられる皆さんも、メディア等でご存じかと思います。そのトリニータに、設立当初から関わっておられる宮明透さんです（拍手）。去年もシンポジウムでお話をしていただきましたが、今回は、ナビスコカップ優勝時を含め、その後どのようになったのかをお話いただきます。

ここまではサロンの会員ですが、今回はゲストスピーカーとして、地域リーグ決勝大会を勝ち抜き、ＪＦＬ参入を決めたＦＣ町田ゼルビア代表の守屋実さんにお越しいただきました（拍手）。よろしくお願いします。

シンポジウムの進め方ですが､お手元の資料の 2 枚目にあります｡まず宇都宮さんから、全体的なところをお話しいただき、次に守屋さんから、町田のサッカーの歩みから現在に至るまでをお話しいただき、最後に宮明さんから、大分でどういうことが起きたのかを話していただきます。それぞれのプレゼンの後に、あまり長い時間は取れませんが、プレゼンに対する質疑の時間を取りたいと思います。3 人の演者の話のあとで休憩を取り、後半戦でディスカッションをします。あまりディスカッションの時間は取れませんが、できるだけフロアーの皆さんからの発言をいただきたいなと思っております。
どうぞよろしくお願いします。

■　プログラム　■

13：30～　開会宣言
サロン 2002 公開シンポジウム事務局長　高田敏志
13：35～　コーディネーター挨拶
サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校　中塚義実
13：40～14：20　講演１．「地域リーグから見えるＪリーグ拡大の現状と是非」
写真家・ノンフィクションライター　宇都宮徹壱
14：25～14：55　講演２．「2011 年Ｊリーグ昇格を目指して！」
ＦＣ町田ゼルビア代表　守屋　実
15：00～15：30　講演３．ナビスコ優勝「大分の変貌とその過程」
大分工業高等専門学校　宮明　透
15：30～15：40　休憩

15：40～16：25　ディスカッション

16：25～　まとめ

16：30～　閉会宣言

第１部　プレゼンテーション

地域リーグから見えるＪリーグ拡大の現状と是非

宇都宮徹壱（写真家・ノンフィクションライター）

□はじめに

宇都宮徹壱と申します。本日はよろしくお願いいたします。

早速なのですが、最初に映像を見せたいと思います。特に予備知識なしにみていただきたいのですが、最初にいくつか情報を出すとすれば、今年ＪＦＬからＪ２に昇格するファジアーノ岡山というクラブがあります。ＪＦＬに入る前、つまり地域リーグ決勝大会からＪＦＬに上がった次の日、正確に言うと 2007 年 12 月３日の岡山の地方局のニュースで流れた映像です。５分くらいなのですが、これをみていただくと、地域リーグからＪＦＬに上がるのがどれくらい大変なのかが一番分かる映像なので引っ張ってきました。まずはこちらからご覧下さい。

・・・映像は省略・・・

ということでみていただいたのですが、ちょうどこの試合が行われたのが 2007 年 11 月 30 日、12 月１日、２日です。２日はＪリーグの最終節だったんですね。覚えている方も多いと思いますが、浦和レッズが最後の最後で鹿島アントラーズに逆転優勝を許すという、大変ドラマティックなシーズンでしたが、その裏でこういうドラマがありました。

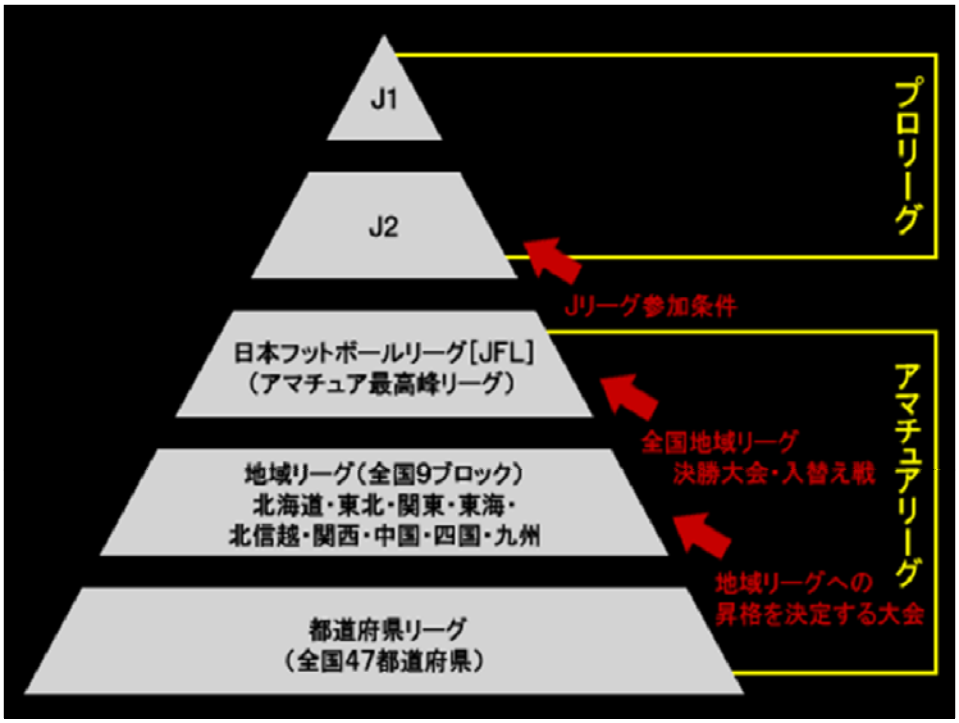
みなさん、ＪＦＬ以下といったらアマチュアで、そんなに盛り上がっていないというイメージを持たれている方もいると思いますが、いまご覧になった映像をみてその凄さを分かっていただけたかなと思います。私もここ３、４年、地域リーグ決勝大会の取材をしていますが、Ｊリーグの最終節よりもこちらを優先させてしまう理由も何となく分かっていただけるかと思います。

それでは、早速私のプレゼンにいきたいと思います。

今日の私のテーマが、「地域リーグから見えるＪリーグ拡大の現状と是非」です。プレゼンの最初に持ってきた写真は、私が出した『股旅フットボール』の表紙に使ったものと一緒です。06 年の地域決勝でＶ・ファーレン長崎があと一歩のところで昇格を逃して、悲嘆にくれている写真ですね。今年は沖縄で地域リーグ決勝大会があったんですけど、幸い長崎は見事に町田ゼルビアに次いで２位で昇格を果たしました。ぼくも長い間このチームをみてきたので、正直ホッとしています。

□日本のサッカーリーグのピラミッド

改めて、日本サッカーのピラミッドを見てみましょう（下図参照）。どの国のサッカーリーグもピラミッドの形をしているわけですが、日本の場合はこのようになっています。今更説明するまでもないと思いますが、Ｊ１とＪ２、このトップリーグの２つがプロリーグです。次が、日本フットボールリーグ、いわゆるＪＦＬです。これがアマチュア最高峰リーグと言われていますけども、実質はプロがあったり、企業チームがあったり、あるいはＪリーグのセカンドチームがあったり、大学が入っていたりと、世界的にみてもユニークなリーグです。その下に地域リーグというのがあります。これが、全国９ブロックに別れています。北は北海道から、南は九州まであります。



先ほど映像で見ていただいた地域決勝というのが、この地域リーグからＪＦＬに上がるための大会ですね。

日本のサッカーはきれいなピラミッドで描かれているのですが、実はこの中には大きなくびれがあると、私は考えております。それは４部から３部、４番目のリーグから３番目のリーグに上がるこの地域決勝が一番厳しい大会なんですね。具体的な数字で言いますと、昨年度地域リーグに所属していたチーム数は 74 です。74 のうち、上に上がれるのは３チームしかありません。つまり、地域リーグの上位チーム、１位のみ、もしくは２位のチームがこの大会に出場し、そこでなおかつ過酷なリーグ戦を戦わなければならないというわけです。

□プレゼンのキーワード

本日のキーワードをいくつか挙げます。

まず、「地域リーグ決勝大会とはどのような大会なのか」ということで、日本で最も過酷な大会である理由を説明したいと思います。

去年の 11 月下旬に「第 32 回地域リーグ決勝大会」が行われました。それぞれのクライマックスシーンを、現地で撮影した写真を交えながら紹介したいと思います。

次に、「拡大を続けるＪリーグ」ということで、Ｊリーグの歴史をチーム数の拡大という観点から振り返ってみたいと思います。

その中で、いまＪリーグを目指しているクラブを、私は第４世代と名付けているのですが､その｢第４世代がＪを目指す理由｣｡その大きな理由は大きく３つあると考えています。その理由を説明したいと思います。

一方で、こうした現象を取材していると「拡大を続けるＪリーグが果たしていいのかどうか」というのは、非常に難しい問題にぶち当たることになります。まだまだ議論する価値があると思いますが、現時点ではＪ２に上がることが鬼門になっているという印象を強く受けております。そこで、ＪＦＬからＪ２にいったクラブがどうなっているのか、という話をしたいと思います。

最後に、「２０１Ｘ年に完成形になっているであろうＪリーグ像」を考えてみたいと思います。

□なぜ「日本で最も過酷な大会」なのか

サポーターの喜怒哀楽の写真です。

第 32 回全国地域リーグサッカー決勝大会は、昨年 2008 年 11 月 23 日から 30 日まで行われました。９日間の大会です。

改めて、なぜ「日本で最も過酷な大会なのか」ということを説明したいと思います。

まずはハードスケジュール。今回は９日間で６試合でした。まずリーグ戦３試合が連続であります。３日連続で試合をやって、３日間休みがあって、そこから決勝ラウンドが３

試合３日連続であります。これほど過密スケジュールの大会というのは、他にほとんどないのではないかと思います。なぜこんな過密スケジュールかというと、金土日に試合を組まなければならないからです。なぜ金土日かというと、この大会というのは基本的にはアマチュアチームのための大会なので、みんな働いているということが前提で試合を組まなければならない。というわけで、どうしても週末に試合を組まなければならないと。それで週末と週末、ときどきは休日が入ったりするということで、だいたい９日間から 10 日間で６試合を行わなければならないわけです。

２つ目の理由は、レギュレーションが非常に厳しいこと。基本的に４つのグループに分かれて、グループラウンドというのがあります。このグループラウンドを１位で通過しないと次のラウンド、決勝ラウンドにいけないわけです。１位で通過しないといけないというのは、非常に厳しいんですね。そのことは、今大会を踏まえながら後ほど説明していきます。

３番目は、毎年変わる昇格条件。2008 年大会に関しては、３チームが昇格できました。ところが２大会前は 1.5 枠だったんですね。つまり、決勝ラウンド１位のチームは無条件で昇格できましたが、２位のチーム、このときはＦＣ岐阜だったのですが、入れ替え戦を戦わなければならなかったんです。要するにＪＦＬが何チームでリーグ戦を行うか、来年何チームになるかによって、昇格の条件が変わるわけですね。こうした条件も、厳しいといえば実に厳しい。

最後に一番厳しいなと思うのが、昇格を逃すリスクが甚大であること。特にＪリーグを目指すチームに関しては、１年間一生懸命頑張って、やっとの思いで地域のリーグを突破し、全国の舞台にやってきたけれども、たった６試合、あるいは３試合でその苦労が水の泡になってしまうと。１年間その昇格のチャンスを逃すということがどういうことかという。そうなると、スポンサーがそこでそっぽを向くかもしれない、サポーターの情熱が下がるかもしれない、自治体の協力もネガティブになってくるかもしれない。つまり、１年１年が勝負なのですよ、このカテゴリーからＪを目指すクラブにとっては。

一方で、実際に将来のＪ参入を諦めたチームもあります。強いといわれるチーム、戦力が整っているといわれているチームでも、緒戦で負けてしまって、その後も立て直しがきかなくてぼろぼろになることが、これまでいくらでもありました。そういう意味で、ぼくのみならず多くの人がこの大会を「日本で最も過酷な大会」と呼んでいるわけです。

□第 32 回地域決勝レビュー

第 32 回大会にどんなチームが参加したのかを説明したいと思います。

まず強調しておきたいことが､今年は初めて 16 チームが参加できることになりました。前回大会が 14 チーム、その前が 13 チームです。４つのグループリーグの中で、３チームのグループと、４チームのグループがあって、不公平であるということがチーム数変更の一番の理由だったのだと思うのですが、今年は４×４の 16 チームでいこうということになりました。

●出場チーム紹介

まずは、それぞれの地域のチャンピオン、北海道はノルブリッツ北海道、東北はグルージャ盛岡、関東はＦＣ町田ゼルビア、北信越はＡＣ長野パルセイロ、東海は静岡ＦＣ、関西は２チームでバンディオンセ加古川とアイン食品、中国地方も２チームで初出場のレノファ山口と佐川急便中国ＳＣ、四国はカマタマーレ讃岐、九州は２チームで沖縄かりゆしＦＣとＶ・ファーレン長崎です。何で１チームのところと２チームのところがあるかというと、前回大会でベスト４のチームを出した地域は２チーム出すことができるというレギュレーションになっています。前回大会でいうと、関西のチームが決勝ラウンドに２チーム出場し、中国が１チームと九州が１チームでした。それぞれベスト４を出したということで、今大会は２チームが出ています。これで全部数えると 12 チームです。

それで、残りの４チームをどこから引っ張ってこようかという話になります。ここからがちょっと複雑なので説明が必要です。

まずはＪＦＬ入りを希望する大学サッカー連盟所属のチーム、つまりＪＦＬに行きたい大学チームがあればそのチームを優先すると大会規約に書いてあります。流通経済大学、古くは静岡産業大学や国士舘などが該当するケースです。結論からいうと、今回は該当チームはなし、となりました。

次は、ＪＦＡ優遇措置を承認されたチーム、つまり飛び級ですね。これは、過去に採用されたのは１チームしかありません。ザスパ草津です。これも今回はありませんでした。

次は、全国社会人サッカー選手権大会というのがありまして、そこで１位になったチームは無条件で出場できることになっています。ただ、そこで１位になったのは、ＡＣ長野パルセイロです。すでに長野は北信越で１位になっているので、ここはなし、ということで東北のＮＥＣトーキンＳＣが、出場権を得ました。ホンダロックＳＣも全国社会人サッカー選手権大会で３位になったので、出場権を得ました。これでやっと 14 チームです。

それで、残りの２チームをどこから出すかということになります。今回から新たに補欠という制度を設けました。補欠１は、関東リーグ２位の日立栃木ＵＶＡ　ＳＣです。次の補欠２は、東海２位の矢崎バレンテＦＣです。これがどういう順番で決まっているかといいますと、すでに２チームを出している地域を除いた、前年度各地域の全国社会人サッカー連盟登録数の比率で配分するということになっています。すごくわかりづらいんですが、それによると１番目が関東で、２番目が東海になります。ちなみに、順番はこうなっています。補欠の３番目が北海道の札幌蹴球団、４番目が北信越のＪＡＰＡＮサッカーカレッジ、5 番目が四国の徳島ヴォルティス・2nd チーム、一番下が東北のＦＣプリメーロです。これらのチームは、補欠で回ってきませんでした。

ところが、大会前にアクシデントが起きまして、ＮＥＣトーキンが辞退しました。その理由は親会社の業績悪化です。非常にいいサッカーをする印象があっただけに、全国社会人サッカーリーグでＮＥＣトーキンをみた地域リーグファンは誰もが決勝リーグ大会での活躍を期待していました。ぼくもそのひとりだったので、非常に残念です。

とにかく、ＮＥＣトーキンが辞退したので、チーム数を合わせるために代替出場チームを決める必要があります。順番でいいますと、北海道の札幌蹴球団が権利を得ると誰もが

思っていたのですが、ところが全国社会人サッカーリーグ４位の松本山雅ＦＣが、なぜか繰り上がってしまいました。繰り上がってしまったというと非常に失礼な言い方かもしれませんが、理由はアナウンスされていませんでした。おそらく、松本山雅ＦＣというチームは、非常にサポーターも多く、地元で人気のクラブであり、かつ上を目指しているクラブだから、できるだけそういうクラブにチャンスを与えようという意志が働いたのではないかと思っています。いずれにせよ、ＮＥＣトーキンの代わりに、松本山雅ＦＣが代替出場することになりました。

●決勝リーグ大会グループラウンドの様子

それでは早速決勝リーグ大会のグループラウンドを紹介したいと思います。

３日間連続で、それぞれ鳥取、高知、北九州で行われたのですが、ぼくは３日間ですべての会場を回りました。

鳥取の１日目、会場はとりぎんバードスタジアムで、ＪＦＬ所属のガイナーレ鳥取のホームスタジアムですね。メインスタンドの一部だけ屋根がかかっていますが、なかなか素晴らしいサッカー専用のスタジアムです。

最初の試合が、初出場のレノファ山口が、静岡ＦＣに２－１で競り勝っています。ちなみに、右上の写真にあります 13 番の選手と競り合っている黒人の選手は、イブラヒマというセネガル出身の選手です。どういう経路かは不明ですが、実際、地域リーグではブラジル出身の選手とか、セネガル出身の選手、韓国人とかが普通にいるんですよね。なかなかワールドワイドになってきています。

第２試合が、グルージャ盛岡対松本山雅ＦＣです。最初に盛岡が先制して、松本が追いつき、また盛岡が引き離すんですが、最後に松本が２ゴールを決めて、３－２で松本山雅ＦＣが勝つというスリリングな展開でした。ビックリしたのが、鳥取の会場に着いて、駐車場が松本ナンバーの車ばっかりだったんですよ。ここはどこだっていうくらい、大勢のサポーターが車で駆けつけていたんですよね。このときは 200 人くらいいたと思うのですが、松本の応援の特徴は、ドラムセットがちゃんと用意されていることですね。セミプロのドラマーの人がサポーターの中にいるらしく､すごく軽快なリズムでコールしています。残念ながら決勝ラウンドにはいけなかったのですが、盛り上がり度ということでは非常に好感の持てるサポーターでありチームでした。

２日目は高知に行きました。春野運動公園球技場です。

このグループは、Ｖ・ファーレン長崎とカマタマーレ讃岐という、共にＪリーグ入りを目指す２チームが組み込まれているために、大変注目されました。この両チームは２日目に対戦して、結果は長崎が２－０で勝利しました。左下の会見の写真ですが、皆さんご存じだと思うのですが、羽中田さんですね。この試合では地域リーグ決勝大会とは思えないくらい報道陣が集まっていたんですが、どうやらテレビ朝日の「報道ステーション」が羽中田さんを追いかけていたみたいです。

ですから、2 試合目のアイン食品と日立栃木の試合になると、カメラを取っていたのはぼく１人という状況だったんですよね。みんな長崎対讃岐の試合が終わったら帰ってしまったんですよ。

さて、アイン食品と日立栃木の試合は、１－１でＰＫ戦になりました。ここまで話を進めてきて疑問に思った方もいらっしゃるでしょう。なぜリーグ戦なのにＰＫ戦が行われる

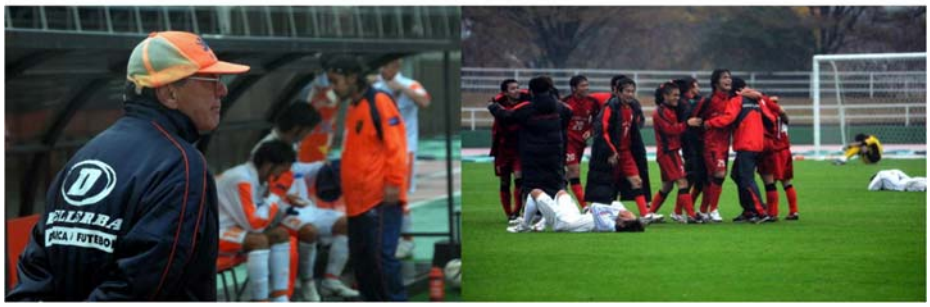
のだろうかと。はっきりいって、この大会の大きな謎なのですが、たぶんこういうことだと思います。地域リーグ決勝大会が始まった当初は、９地域のチャンピオンしか出られなかった、つまり９チームが３グループに分かれてリーグ戦をやっていたわけです。ただし３チームのリーグ戦だと、勝点の並ぶケースが多くなる。そこで無理矢理決着をつけて、勝点の差をつけようというところから、リーグ戦におけるＰＫ戦がスタートしているのだと思います。ちなみに、ＰＫ戦で勝ったチームは勝点２が与えられ、負けたチームは勝点１が与えられます。だからこのときはアイン食品がＰＫ戦で勝ったので勝点２を得て、日立栃木は勝点１に終わりました。

３日目は、福岡の北九州にあります本城陸上競技場に行ってきました。ニューウェーブ北九州がホームにしているスタジアムです。

この日はすごい雨だったんです。雨だし寒いし、とんでもないくらい水溜まりがありました。

しかも、このグループはすごい混戦だったんですね。大方の予想では長野が本命だったのですが、その長野が加古川に２点リードしていたのに、その後３失点して逆転負けをしてしまいました。この時点で加古川が首位に立ちます。

しかし、加古川が首位になったのですが、次の試合のホンダロックとかりゆしが、まだ決勝ラウンドに上がれるチャンスが残っていたんです。かりゆしが勝てば、かりゆしが１位になる。ホンダロックが勝てば、ホンダロックが首位に立つ。ただし、両チーム引き分けで、ＰＫ戦になったら加古川が首位になるという状況でした。ずっときっ抗した展開が続いていたんですが、ホンダロックが試合終了直前で決勝ゴールを決めて、見事に沖縄行きのチケットを手にしました。対するかりゆしの選手たちはバタバタと倒れている。こういうシーンが、地域リーグ決勝大会では本当によくみられるわけです。



（前のページの）左下の写真は試合後の長野のベンチの様子です。ここの監督は、ご存じの方も多いと思うのですが、ビエイラといってブラジル人の監督です。非常に国際経験豊かな経歴の持ち主で、コスタリカ代表、オマーン代表、それからイラン代表の監督もやっている方です。ジョホールバルで日本が対戦したときのイランの監督はこの人です。これほどの人が、北信越リーグで監督をやっているわけですね。それほど世界の厳しさを知っているビエイラ監督をして「これほど厳しい大会を私は知らない」と言わしめるくらい、地域決勝という大会は過酷なんですね。本当にがっかりとうなだれていましたね。それで、奥さんがドイツ人なんですが、雨でうなだれながら引き上げてくる選手たちを１人１人に、抱擁して慰めていました。この大会で一番印象に残っている光景でしたね。

●グループラウンドの結果

そんなわけで、グループラウンドでこのような結果になりました。先ほど言いました、本城で行われましたグループＡは、ホンダロックが勝点６、バンディオンセが５、長野パルセイロも５、沖縄かりゆしが２。本当に接戦だったんですね。バンディオンセは、先ほどの映像でもみましたけど、またしてもぎりぎりのところで昇格を逃している。今回も決勝ラウンドの夢を断たれ、来期以降は上を目指さない、地域に根ざしたクラブでやっていくということを発表しています。

グループラウンドＢは、Ｖ･ファーレン長崎です。

グループラウンドＣは、レノファ山口が松本山雅にＰＫ戦で競り勝って、決勝ラウンドに出場しています。

グループラウンドＤは、町田ゼルビアです。これは結構危なかったですよね。矢崎バレンテと全勝対決で戦って、最初ずっとリードされて、パワープレーでやっと１点を返してＰＫ戦で競り勝ったそうです。

このホンダロック、Ｖ･ファーレン長崎、レノファ山口、町田ゼルビアの４チームが決勝ラウンドに進出することになりました。

●決勝ラウンドの様子

決勝ラウンドは、沖縄の石垣島で行われました。石垣島サッカーパークあかんまというスタジアムです。

わたしは今回初めて沖縄に行ったのですが、なぜ沖縄が会場に選ばれたのか、いまだに謎です。ゼルビアが今回の大会を勝ち抜くのに１千万円かかったと聞いているのですが、１億円に満たない運営でやっているクラブに、１千万円がどれだけの重みを持つかは、容易に想像がつくと思います。

決勝ラウンドは４チームによる総当たり戦です。初日は、長崎がロックに５－０で圧勝しました。町田が２－０で山口に勝ちました。

２日目は、ロックが山口に２－０で勝利。長崎と町田は両チームとも本命視されていたのですが、90 分で決着がつかず、ＰＫ戦の末、５－３で町田が勝ちました。そして、この時点で町田と長崎が３位以内を確保しました。

最終日は、ホンダロック対町田は、２－１で町田が勝ち。長崎対山口は、１－０で長崎が勝利しました。

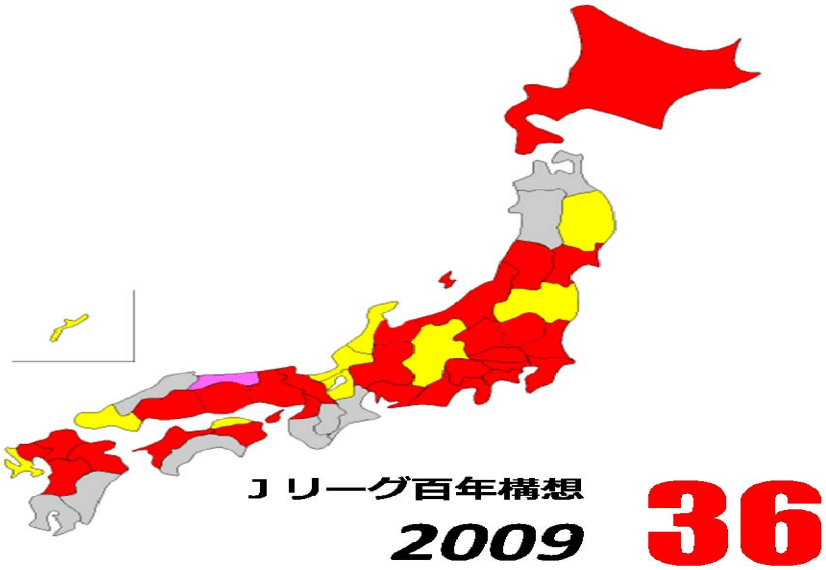
最終順位はこうなりました。町田ゼルビアとＶ･ファーレン長崎が文句なしのＪＦＬ昇格です。３位のホンダロックはＪＦＬ次第ということになりました。レノファ山口は健闘しましたが、今回はＪＦＬに上がれませんでした。

結局のところ、この大会から何チームが上がれるかというのは、すべてＪＦＬの結果次第なんですね。３日目が行われた日は、ＪＦＬの最終日でもありまして、ＪＦＬの最終順位はこのようになりました。１位ＨｏｎｄａＦＣ、２位栃木ＳＣ、３位カターレ富山、４位ファジアーノ岡山、５位ガイナーレ鳥取です。このうち準加盟で、なおかつ４位以内のチームがＪ２に昇格できるという条件になっていましたので、栃木ＳＣ、カターレ富山、ファジアーノ岡山の３チームがＪ２に上がり、地域リーグ決勝大会の上位３チーム、ホンダロックまでがＪＦＬに昇格することが決まりました。

□Ｊリーグ百年構想　２０１Ｘ年

Ｊリーグのクラブがどれだけ増えてきたのかを、日本地図で示してみたいと思います。

1993 年にＪリーグが開幕したときは、10 チームでした。Ｊリーグがあった都道府県というのは、これだけしかなかったわけですよね。横浜フリューゲルスの準フランチャイズは除いています。



それが、現在では 36 チームになりました。日本地図で黄色いところはＪリーグを目指しているチームがある県ですが、それらを含めるとＪリーグを目指すクラブがない県の方が少なくなっています。

一方で、これからＪリーグを目指したいというクラブもたくさんあります。

ＪリーグとしてはＪ１を 18 チーム、Ｊ２を 22 チームの 40 チームでしたいという意向

を表明しています。つまり、現状では残り４枠です。これから残り４枠をめぐる争いというのが、佳境に入っていくと思います。

●日本サッカーリーグの歴史

ここでちょっと話題を変えてみましょう。Ｊリーグの歴史を語る上で、最初に日本サッカーリーグ（ＪＳＬ）を振り返ってみる必要があると思います。

ＪＳＬは 1965（昭和 40）年に８チームでスタートしました。当時は全部企業チーム、すなわちサッカーはアマチュアスポーツでした。なぜ日本にサッカーリーグがスタートしたかというと、デットマール･クラマーさんが、日本を強化するためには全国リーグを行う必要があると主張したからです。それで、よく考えてみますと、団体競技で日本の全国リーグができたのは、プロ野球に次いで２番目なんですよね。31 年ぶりの全国リーグ。バレーボール、バスケットボール、ラグビーが全国リーグを始めたのは、もっとあとです。

とはいえやがてＪＳＬも、お客さんが伸びない時代が続いて、やはりプロ化していかなければいけないという流れになっていきます。そこで、Ｊリーグが 10 チームで誕生します。これが 93 年の話ですが、Ｊリーグが始まる直前に、新聞の全面広告でＪリーグが始まりますよという宣伝をしていました。このときはサッカー以外のプロ選手がボールを持ってサッカーがプロになるということをアピールしていました。

さて、Ｊ開幕時に名を連ねていた 10 チームには、ほとんどに責任企業がありました。地域密着というのは後付けだったとぼくは思っているのですが、清水を除く９チームは、ちゃんと力を持った企業がバックアップしていました。この企業色が強かったオリジナルの 10 チームを、ぼくは第１世代と呼んでいます。

それ以後にＪに参入したチームを、ぼくは第２世代と呼んでいます。オリジナル 10 以後ですね。具体的にいえば、2 年目に参入したベルマーレ平塚（現湘南）やジュビロ磐田、それ以降のＪ１・Ｊ２に分かれる前の 99 年までにＪクラブとなったチームですね。

第３世代というのは、2002 年のワールドカップ、より具体的にいうと、大分と新潟ですね。これらのクラブに特徴的なのは、最初はハコありきだったこと。つまり、まずスタジアムを作って、それから恒常的にスタジアムを活かすためにクラブを作ったと。順序は逆だったんですけど、ふたを開けてみるとこれだけお客さんが入る、チームが強くなっていく、トップリーグで頑張っている、代表選手を出すようになった、と非常に後付けではあるんですが成功例として語れるようになった。

この新潟と大分の２チームに励まされて新たにＪを目指そうとしているのが、ぼくが今追いかけている第４世代、地域からＪへの流れだと思います。これも時代的な背景もありまして、地域はどこもどん詰まりなわけなんですね。昔だったら、企業を誘致しよう、工場を誘致しよう、あるいはバブルのときなんかはテーマパークを作ろう、などいろいろな手法があったのですが、これからはそうではないだろう、と。スポーツクラブを作って地域を活性化させて、例えばチームがＪリーグで活躍するようになったら、お客さんも県外から入ってくるし、地域の知名度も上がる、イメージもアップする、お金も落ちてくる、というような発想でスタートして、一気にこれだけ増えたわけです。まあ、思い切りデフォルメした言い方ではありますが、描いている図はどこもそんな感じだと思います。

●なぜ、Ｊなのか

ただ、一方でそれぞれの事情があると思います。「なぜ、Ｊなのか？」。ここでは大きく３つのケースを挙げておきたいと思います。

１番目のケースとして、グルージャ盛岡、ツエーゲン金沢にみられる「地域活性」という部分ですね。どちらも、これからどう地域を活性化させていくかというところで、やはりスポーツであろうと。グルージャ盛岡の場合、隣のモンテディオ山形の成功をみているので、山形にできるのであればうちらにもほしいよな、というところからスタートしているようです。ツエーゲン金沢に関しては、もうすぐ新幹線が開通するということで、もっと地域を活性化させていかなければならないという事情がありました。どうもこの２つのケースを見ていると、県サッカー協会の絶大なバックアップは得られていない、という共通点も浮かんできます。いろいろと問題も多く、今に至っているという印象を受けます。

２番目のケースとして、ファジアーノ岡山やＦＣ岐阜。どちらも今はＪ２で活動していますが、この２チームの誕生のきっかけとなったのが「国体強化」です。国体があるのでチームを強化しよう、あるいはスタジアムができた。国体が終わった、さあどうする、というところからスタートしているチームです。国体というのは、莫大な金が動くわけで、それに伴っていろいろなものが生まれます。当然、それらを今後どのように活かしていこうかとなってくるわけで、岐阜にしても岡山にしても、少なくともＪクラブが地元に誕生したという意味では、うまく活かせた例だと思います。

３番目のケースは、Ｖ・ファーレン長崎やＦＣ町田ゼルビアにいえるのですが、「人材流出」ですね。長崎の場合は高校選手権の常連・国見高校があります。町田ゼルビアも、少年サッカーでは大変有名な地域で、どちらも何人ものＪリーガーや日本代表選手を輩出しています。しかし、なかなかそうした選手が地域に戻ってこない、地域に受け皿もない。じゃあチームを作ろう、というところからスタートしています。

□Ｊリーグをめぐる動きの評価と課題

いま、Ｊリーグを目指すクラブが増えてきているところで、評価と課題をいくつか挙げてみます。

評価は次の通りです。「地域社会での新たな結びつき」、「地域経済の活性化」、「地域の子供たちの誇り・規範」、「元Ｊリーガーの受け皿」です。このうち、「地域経済の活性化」や「元Ｊリーガーの受け皿」というのは、実のところ微々たるものだと思っています。そんなにお金儲けできたとか、地域が潤ったという話は、特にこの世知辛いご時世では、難しい話なのだと思います。

むしろ課題の方が多いですね。練習環境は非常に未整備です。土のグラウンドで練習しているのが当たり前。あと、先ほども言いましたが、ＪＦＬへの高いハードル。地方だと

スポンサーの確保が難しい。選手の生活保障も、非常に厳しいものがある、と。バイトをしながらやっている選手も、非常に多くいますね。

●Ｊ２という鬼門

では、これらのチームがＪに昇格できれば、すべてがＯＫなのか。残念ながら、そうは言い切れない状況があるのも事実です。ここでＦＣ岐阜というチームを例に挙げておきます。このチームは、2001 年から県１部からスタートして、2004 年に東海２部、2006 年に東海１部、2007 年にＪＦＬで、2008 年にＪ２と来ているわけです。

ところが、ぼくが初めて取材した東海１部のときは、平均入場者数が 4,081 人だったんですね。もっとも地域リーグの場合、ホームゲームが数試合しかなかったから、どこまで説得力のある数字か分かりませんが、それでも平均で 4,000 人を超えていたわけです。ところが 2007 年のＪＦＬのときは、3,529 人で減っているんですね。それでは昨年Ｊ２になって１年目でどうだったかというと、3,745 人です。この数字はＪリーグ全 33 チーム中、上から 31 番目です。つまり、カテゴリーが上に上がるにつれて、お客さんが減っているという、ちょっと矛盾した状況が見えてくるわけです。

なぜ、そうなってしまうのか。いろんな理由が考えられると思うのですが、まずはホームゲームでなかなか岐阜は勝てなかったことが挙げられると思います。実際、去年は３勝しかしていません。ＪＦＬ時代、あるいは地域リーグ時代、ずっと勝っている試合を見てきたお客さんが負けるチームをみると、それだけで応援する気を失う。とくにライトなファンの場合、その傾向は顕著です。それと関連して、Ｊリーグへ上がるまでの物語が劇的だっただけに、そこで燃え尽きてしまっている、つまり物語が完結してしまって、その後の物語を見る気がしなくなってしまう。逆に言うと、Ｊ２の面白さとか、Ｊ２ならではの魅力というものを、クラブが提示できていない。いや、むしろこれはリーグそのものの問題なのかもしれませんが、とにかくそういう現状があります。

こういうことを言っている人がいます。Ｊ２に上がるうえで、「基本的に『負けること』を前提にして、物事をすべて考えていかないといけない」。この言葉の主は、ファジアーノ岡山の木村正明社長です。こういったリアリスティックな考え方のもとに、これからＪ２を戦っていかなければならない。そう、木村社長は、以前インタビューしたさいに答えてくれていました。

□２０１Ｘ年のＪリーグ像

そろそろまとめに入りましょう。

今、日本のピラミッドはこういう仕組みになっています。一番のひずみは、ＪＦＬからＪ２に上がったら、降格がないことでしょう。ただ、いずれＪ２が 22 チームになったときに、Ｊ２とＪＦＬとの間で昇格・降格が行われることがアナウンスされていて、これで日本のピラミッドは完成すると見られています。

ただ、懸念がないわけではない。これだけチームが増えると、競技レベルはどうなるの

か、低下するのではないかという危惧は払しょくできないと思います。それと、Ｊ２から降格したクラブの経営悪化は免れないでしょうね。落ちたら落ちっぱなしになる可能性も十分にあります。一方で、ＪリーグはＪ３を作らずにＪＦＬのままでいこうという判断を下したわけなんですけど、ではこれまでプロでやってきた選手たちに対してＪＦＬが、きちんとプレーできる環境を提供しているかというと、まだまだ難しいと思います。ＪＦＬでも酷い環境でやっているところはいくらでもあります。シャワーが出ない、照明灯がない、そういった環境の中でどうやって実質的な３部リーグとして充実した試合をみせられるのか。非常に個人的な意見を言わせていただきますと、秋春開催を云々言う前に、まずはＪＦＬを何とかしてほしい。これをぼくは一番、訴えたいです。

以上です。どうもありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。時間の限られている中で、掻い摘んでお話しいただきました。ここでどうしても宇都宮さんに質問しておきたい方はいらっしゃいますか？

最後にまた質問の時間を取りますので、お手元の質問票に、何かありましたら書きとどめていただき、後でまた質問をしていただけたらと思います。

ナビスコ優勝！－大分の変貌とその過程

宮明透（大分工業高等専門学校）

□はじめに

ご紹介いただきました宮明です。昨年も公開シンポジウムに呼ばれまして、大分トリニータがナビスコカップで優勝し、リーグ戦で４位になりました。今年も呼ばれたので、今年は優勝するのではないかなと思っているのですが・・・ハイ、非常に験を担いでおります（笑）。

最初の写真を何にしようかなと、少し悩んだのですが、ボランティアの写真を１枚目に入れました。これは、サテライトの試合前の１シーンです。みても分かるように、ご高齢な方がいらっしゃいます。というか、大分のボランティアはご高齢な方が多いのです。

1993 年にトリニータのボランティアを立ち上げるときから私は関わっておりまして、ボランティアの事務局長をやったり、会長をやったり、現在は顧問をしています。いま、ボランティア登録者が 240 人ほどおります。毎試合、試合運営に来られる方が 120 人くらいいます。そして、こういう年代の方もたくさんおられます。

大分はやはり田舎なので、若い人はみんな東京や大阪に行ってしまい、過疎化が進んでおります。でも、こういう方々が時々、ボールボーイ・ボールガールもするのです。サテライトの試合のときに。若干動きが遅いのですが、でもやるんです。芝生の養生の関係で熊本で試合があったときに、熊本県の高校生が大会をやっていて、高校生のボールボーイが不在でした。Ｊ１の名古屋との公式試合のときに、こういう方々がボールボーイ・ボールガールとしてＪ１でデビューしました。大分はそういうこともやっています（笑）。

これは（左写真）ナビスコです。人間の行列が続く大分側の入口ですけど、大分県から１万人の方々が行きました。詳しい話は後ほど出てき

ますが、このシーンをみて、県の地元紙である大分合同新聞の東京支局長の方は、東京の街中で大分弁をこんなに聞くのは初めてだ、と言っていました。それほど多くの方が、ナビスコを見に東京に行きました。

これはスタンドから撮ったシーンです（下写真）。トリニータのホームスタジアムである九石ドームのゴール裏は 5,000 席です。ところが国立競技場は１万席。この１万席を横にはみ出しまして、おそらく大分のサポーターが１万 5,000 から 6,000 人いたと推定しています。そのうち、大分県内で売れたチケットは、だいたい１万 1000 枚近くいっていました。１万人以上の人が、大分から東京に移動したことがわかります。

これは大分県の歴史が始まって以来のことなのです。甲子園の応援で、バスや夜行列車を使って、2,000 人から 3,000 人はアルプス席に応援に行くんです。でも、大分から東京まで１万人が移動することは大変なことなんです

このシーンをみて、これがテレビに映ったときに、一番ビックリしたのは大分県人なんですよね。地元大分でテレビを見ている人たちは､「あそこにいる人たちは、どこの人ね？」と言って（笑）。ところが、みんな大分から行ったんですよね。そして、先ほど言いましたけど、ご高齢の方たちがかなり東京に行きました。

ゴール裏にいた私の知り合いが、席の前に 70 歳くらいの肩の曲がった御夫婦がいて、旗を振っていたそうです。ものすごく不釣り合いなんですよね、ゴール裏で立ち上がっているのが。でも、ちゃんと試合前に、２人でゲームフラッグを作ってきて上げる。試合中は座らず、ハーフタイムだけしか座らずにずっと応援していて、試合が終わったら感動してすごく泣いていたんです。その御夫婦の後ろにいた私の友人も、涙腺が一気に崩壊したという話を聞きました｡そのくらい最後のところはかなりの涙が流れたと聞いております。

トリニータの優勝シーンをみて、全く信じられなかったですね。1993 年にクラブ設立の検討を始めたため、Ｊリーグができた時には、まだトリニータはありませんでした。私たちがチームを作った当時、私は大分県サッカー協会の常務理事をしておりまして、溝畑社長と夜９時ぐらいに集まって一緒に打ち合わせをしていました。溝畑社長は当時、財政課長で、一番忙しいところにいて、大分県の 6,000 億の予算を切り盛りしていました。あの人の仕事が終わるのは、９時、10 時なんですよ。私もそれまで時間を潰して、サッカー協会の方と一緒に９時過ぎに集まって、週に１回ほど打ち合わせ、それを続けていました。そうすると、終わるのがだいたい夜中の１時、２時なんですよね。それでまた次の日に仕事に行かなければならない。ちょっとしんどかったですが・・・・。

□１万人の大移動を検証

●ナビスコカップ、準決勝

なぜ１万人もの人が行ったのかというのを探ってみたいと思うんですけど、これはナビスコカップ準決勝の名古屋戦のゴール裏の写真です（写真略）。見てわかるように、試合前に選手が練習しているとき、いつもと応援が違ったんです。いつもは選手コールだけするのですが、隣の人と手をつないでいますよね。つないだ手を高く上げて「国立へ行こう」の大合唱を始めたのです。「おら、東京へ行くさ」の横断幕が出ていますけど、その応援で選手たちのモチベーションがメチャクチャ高くなりまして、試合内容がすごく良かったんです。ウェズレイのフリーキックで点を取って、完璧に０点に抑えたんです。終わった後、ここのサポの方々は、「国立で会おう」が合言葉になったんですね。

●１万人移動のすごさ

１万人移動のすごさと書いてありますけど、例えば昨年山形がＪ１に昇格しました。このときに愛媛に行ったのが 300 人弱ですよね。大分がＪ１に昇格したときに、大宮に私も行ったのですが、だいたい 600 人弱でした。今年の高校サッカー決勝、鹿児島城西の試合で、鹿児島からは 1,000 人から 2,000 人が行ったと言われています。

大分県の人口が、120 万人なんですよ。ということは、１万人以上が行くということは、だいたい 100 人に１人が行っているわけです。これが東京ならば、10 万人が移動している勘定になります。東京で 10 万人が移動するとなると、それこそ Exile（イグザイル）だとか、生オバマ大統領の演説を聴くとか、それくらいのイベントでないとなかなか集まらないと思うんですよ。でも、これが九州の片田舎の大分から動きがあったんです。

大分空港から東京まで、１日 10 便しかないんです。満席になったとしても、せいぜい 3,000 人くらいにしかならない。しかも、２ヶ月前に決勝進出が決まった時には、ここは３連休で観光客にほとんど押さえられていました。だから、大分空港からの移動は、せいぜい 1,000 人から 2,000 人だったと思うんですよね。あとはみんな、福岡空港、北九州空港、熊本空港から。それから新幹線で６時間、宮崎から出ている寝台特急「富士」、あるいは一昼夜かけて大阪まで瀬戸内海をフェリーで行ってそれから新幹線。あとは弾丸バスツアーも出ました。国立に向けて、前日の夜６時くらいに出て、翌日の 11 時頃に着き、試合を見たら１時間もしないうちに帰るという、弾丸バスツアーもありました。そうしたバスも、５、６台あったと思います。自家用車でいった方も、結構おりました。

確かに福岡空港から東京は１時間半と簡単にいうんですけど、こんな状況で、大分から福岡空港まで高速を使っても２時間、準備を考えると５時間前に出ないとダメなんですね。ほとんど１日仕事なのです。

●決勝までの大分県の様子

でも、それほどのことをしてまでも、国立へ行きたかったという県民感情がどこにあるかというと、準決勝で勝ったのが、９月７日ですね。それから 11 月１日のナビスコ決勝まで、実に街の中が盛り上がったんです。まず、商工会がフラッグ 800 本作ったり、高さ 20m

以上あったと思うんですけど、「勝つ！」というビッグ大壇幕を５枚、大分市内のデパートや大型ショッピングモールにぶら下がりました。いろんな商店街とかにも、「勝つ！」という旗が全部出ました。それから、ツアーが計画されたら地元紙の大分合同新聞に載るわけなんですけど、その日で満席になってしまいます。翌日の新聞で満席になったので第２弾、第３弾・・・と。こうしたことで、県民の気持ちが自然発生的に盛り上げていったんですね。そうすると、みんなで行こう、という呼びかけがすごくなっていきました。

先日Ｊリーグから出された観戦報告書の中にもありましたけど、大分は観戦に行くのに誘う呼びかけが多いというデータが出ていました。国立に行くサポーター同士の呼びかけがすごく多かったんですよね。

それで、国立の決勝までの約２ヶ月間の間に、よく聞いてみたら、「生きている間に１度国立に行ってみたい、もう二度とないかもしれない」という声も多く聞かれました（笑）。事実、ゴール裏にいる人は確かに若い人が多かったんですけど、メインから少し外れると 50 歳、60 歳、70 歳代の方々がすごく多かったんです。だから、圧倒的に高齢者で占められたんですね。しかも中には、普段九石ドームには応援に行かなくて、初めて国立でトリニータの試合を見たという人も、結構いたんです（笑）。せいぜい１年間で２，３試合しかみない人も、ほとんど国立に来てしまったんです。ですから、11 月１日にナビスコで勝った後、大分はすごい集客力でした。もちろん、優勝戦線にもいたんですけど、３万人越え、あるいはそれに近い数の観客が続いたんですよね。ここで新規のサポーターが、5000 人、6000 人付いたと思います。これを今シーズンどう続けて行くかということが、クラブとしての課題だと思います。

11 月１日に優勝しました。これは 11 月２日の夕方優勝報告会の写真です（写真略）。優勝報告会をするよ、と新聞の片隅に少し載りました。たった 30 分間のイベントなんですけど、7,000 人が集まりました。せいぜい集まって 2,000 人から 3,000 人だろうと言っていたのですが、7,000 人もの方が 30 分間のイベントに集まってしまった。

これにはビックリしました。

□大分トリニータの歴史

●スポンサー

こうなった事情を過去から遡ってみますと、大分は 1994 年の大分県リーグからスタートするわけです。レジュメの右側に書いてあるのは、胸スポンサーです。マルハンの胸ス

ポンサーを認めてほしいということで、署名活動を一昨年からしておりまして、昨年私がＪリーグの方に持っていきました。まだ認められてはいないんですけど、胸スポンサーは何億というお金になるんですけど、地方にはなかなかそれだけのお金を出すメリットが少ないんです。ですから、うちの溝畑社長が狙っているところは、ほとんどがオーナー企業です。会長の一言で、億の金が動きそうな企業です。そういったところに乗り込んで行きます。そこで夢を語って、夢を共有して、なんとかスポンサーになってもらう。朝日ソーラーの林社長もそうでしたし、ペイントハウスの星野社長もそうでしたし、いまメインでやっているマルハンの会長さんもやはりそういう方です。

通常の企業であれば、地方のクラブになかなかお金を出せないんです。広告価値が少ないんです。億を投資するだけのメリットが少ないのです。だからそういったところで、地方のクラブは資金面で毎年苦慮し続けています。

●Ｊ１への道のり

そういう中で、最初の監督には韓国人の方にお願いしました。その文正植氏は韓国サッカー協会の副会長をしていましたが、２、３年前に亡くなりました。県リーグからスタートして、九州リーグ、地域リーグ。この地域リーグ決勝大会もすごく危なかったんです。２位で。先ほど地域リーグの話がありましたけど、このときは岡山で予選リーグをやって、４チームでの決勝大会は大分でありました。このとき、大分県サッカー協会理事長の方が大分に強引に引っ張ってきて、地域リーグ決勝大会をやったんです。地元の方が絶対に応援が多いということで。この決勝大会で大分は１敗するんですけど、最後の３試合目で勝ったときに初めて 7,800 人のお客さんが大分市営陸上競技場に集まったんです。それが、大分トリニータの試合を見て初めて涙を流した試合でした。

それから苦しかったことも多くて、ＪＦＬの初年度（1996 年）は 10 位だったんですけど、２年目は監督の朴景浩という人が途中交代します。この人は韓国サッカー協会の技術委員長をされていた方なんですけど、代わってから混迷の度を深めました。1997 年は、いつチームが崩壊してもおかしくない状況でした。持ち直してくるのは、ペイントハウスがスポンサーについた 1998 年からです。Ｊ２時代の 1999 年（３位）、2000 年（３位）、2001 年（６位）と、最終節で順位が決まるというような、ドラマチックなシーンが続くんですね。2001 年は 6 位とありますが、６チームが団子状態だったんですね。

そして 2002 年、ちょうどワールドカップが大分で開催されたときに、大分はＪ２で優勝して念願のＪ１昇格を達成して、以後こういう順位で推移しています。（03 年 14 位、04 年 13 位、05 年 11 位、06 年８位、07 年 14 位、08 年４位）。みて分かるように、ずっと上がってきているんです。他のクラブは低迷したり、Ｊ２に落ちたりするのですけど、大分はすごく上昇志向が強いんです。

●大分トリニータ　溝畑社長の上昇志向

それは何かというと、向かって左の方が溝畑社長なんですね。右がエジミウソン選手なんですけど。昨年 12 月にファン感謝デーが別府の城島高原であったときに、上から吊したところに社長自ら参加するんですよね。そういう非常に奇人、変人ということで、エネル

ギーと行動力のある社長です。

昨年から「カンブリア宮殿」とか、配布した資料の中にも、文藝春秋の記事にも載っていますし、今度久米宏さんの番組に出るとも言っていましたけど、非常に情熱的な方です。この方がいなければ、もちろんトリニータはここまでこなかった。いつも攻めます。多少の借金をしてでも、良い選手を取ってくる。ちょっと間違えると、叩かれる。でも、叩かれても、彼は諦めないというところがありますね。

溝畑社長の上昇志向と書いてあります。彼は非常識への挑戦、奇人、変人、と書いてありますが、先ほどから言っておりますが、夢を語れる、共有できるスポンサーをみつけてくると。

Ｊクラブの基本は「経営・強化育成・社会貢献」が三本柱です。特に地方は経営というところに対して、本当に厳しい局面に立たされています。リスク承知で前へ、常識ではＪ１には残留できない、と書いてあるんですけど、昨日溝畑社長と話したんですけど、Ｊ１の最低ラインは 20 億いる。10 億だったらＪ１から落ちてしまう。１年、２年は保っても、３年もＪ１を維持するのはしんどい。やはり 20 億あればなんとかなるんだけど、毎年 20 億の資金を一地方の田舎のチームが持つことは非常に厳しい。そういう面では、スポンサーの前で社長は裸になることだって厭いません（笑）。大分にはフグの美味しい店があるのですが、そこの仲居さんたちは社長の裸を何度もみているんですね。

まあ、そういうエネルギッシュな社長がいるというところも、大分の特徴であるし、2002 年のときに彼はワールドカップを決めるど真ん中にいましたから、自分でスタジアムとか、周辺の整備をここぞとばかりに作ってくれました。そこでハードのベースができあがっているというのは、今の大分のすごく大きい力になっています。

●目に見えない力の大事さ

あと去年良かったのは、目に見えない力の大事さをシャムスカ監督がうったえたんです。「絆」とか「結束」だとか、「一丸」だとか。特に、サポーターや市民とのふれあいに関して、シャムスカ監督がよく言っていたのは、こうしたことがチームを強くするんだ、と。メディアを含めて、われわれはファミリーであると。あの方は、ずっと言い続けます。

こういった目に見えない力を、チームを作るときにすごく大事にするから、練習が終わって、クラブハウスから車に乗るまで 30ｍから 40ｍくらいの距離があるのですが、選手がその間ファンとの交流で、自分の車にたどり着くまでに 30 分や１時間いることもあります。選手もずっとしゃべるんです。大分のファンは、特に年配の女性の方が多いんですけど、夕方にご主人の夕飯を作らなくてもいいのと聞くと、もう作ってきたからいいのよ、って言うんです。それで、そうした人たちが、差し入れを選手にするんですよ。だから、そういうアットホームな感じというのは、すごく地域密着しているなという感があります。

これ（前ページ写真）は、毎試合大分のベンチ裏に飾っています。

□九州のサッカー事情

そうしたことで、大分はサッカー環境がよくなってきたのですが、九州だけをみますと、ＪＦＬ以上がほぼ全県にできています。九州リーグに残っているのが、鹿児島だけになったんです。あの鹿児島実業とか、鹿児島城西とか・・・Ｊリーグに多くの選手を出している鹿児島県にトップチームがないんです。

これについて私は思うんですけど、鹿児島城西高校だとか鹿児島実業が優勝しても、上につながらないから、言葉は悪いんですけど、鹿児島というのは草刈り場になっちゃっているんです。だから、このへんのところをもっと鹿児島の人に考えてもらって、トップチームを作って、ぜひ九州ダービーをやりたいなと思っているんですよ。

そして、今年九州からＪ２からＪ１にどこでもいいから上がってほしいなと切実に思っています。一昨年、アビスパがＪ１に上がったときに、九州ダービーがＪ１で初めてできたんです。そのときに、大分から約１万人の人たちが博多の森競技場に行きました。競技場は満員、２万人が満席になりました。例えば熊本がＪ１に来ますと、中九州ダービーで、阿蘇山を境に大きな決戦が起こるような気がしていて、すごく九州は盛り上がると思うんですよね。ぜひこの鹿児島にもＪクラブできて、Ｊ１に上がってきて切磋琢磨していきたいなと思っています。サポーターも同じ考えなんですよね。今は大分もアウェーにたくさん行くようになりました。芝生の養生の関係で熊本で試合があるときには、１万人近くの人が熊本に行きます。広島に行くと、車で５時間くらいかかるんですけど、5,000 人から

6,000 人の人が移動していきます。福岡であれば、九石ドームの大分サポがほぼ行きます。それくらい人の心に、大分トリニータというのは浸み込んできています。

□地域になくてはならない存在のトリニータ

これは、昨年大分トリニータに初めてできたマスコットキャラクターです。これは亀で、名前は「ニータン」といいます。飾り物をいっぱいしていますけど、この飾り物はスタジアムに来たおばちゃんたちにもらったものですよ。寒いのにマフラーがないといって、マフラーをくれたり、頭が寒そうだといって、帽子を作ってくれたりして、スタンドの上から下ろしてくれるんです。そういうことが、結構多いんですよね。

今度も私の知り合いの 50 歳前後の姉妹が、ナビスコの優勝のご褒美に、ロスでありますパンパシフィックチャンピオンシップをみに行くと言っていました。そういう、ロサンゼルスに行くという方も、大分には結構おります。

そういうふうにして、地域になくてはならない存在に、大分トリニータはなってきています。1993 年にチームを作ろうと社長に協力してほしいと言われたときから考えると、本当に隔世の感があります。

でもやはり、まちの中自体が、スポーツの話題で盛り上がる。特に年配者の方の話が、すごくいいんですね。私はバスで通勤しているのですが、バス停なんかにいると、「ナビスコ決勝の時、どこの席におったん」、「私は前の方におったんよ」、「私はバックスタンドにおったんよ」、なんていう会話があります。こんな会話は今までありませんでした。でも、おじちゃん、おばちゃんが、そんな会話をするんです。それを聞いて、地域に根付いてきたなという感じがしてきたんです。

ただ、社長も言っていますけど、世界に出たいと。今年はＡＣＬへの出場権を取って、なんとか世界にいって、「日本一になったから今度は世界一になれや」、と言っています。1993 年に会ったときも、そんなことを言っていたんです、「日本一になるんや」、と。何をバカなことをと、みんな言っていたんですけど、でもだんだんこうしたことが実現してくる社長の行動力は本当にすごいなと思っております。

長々と話をしてしまいましたけど、今大分県人はこのクラブがあることを本当に誇りに思っております。ぜひまた来年も公開シンポジウムに呼んでくれたら、今度は世界大会に行けるんじゃないかなと思っています。

ここで話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。大変夢のある話をしていただきました。

配付資料

テーマ「　地域から見たＪリーグ百年構想　」

・・・ナビスコ決勝「大分の変貌とその過程」・・・　　宮明　透

☆　大分の歴史（戦績、歴代監督、胸スポンサー）

西暦	成績	監督	胸スポンサー
１９９４年	４月クラブ発足		
	大分県リーグ１位	文正植　監督	朝日ソーラ
１９９５年	九州リーグ１位	文正植　監督	朝日ソーラ
１９９６年	ＪＦＬ１０位	文正植　監督	朝日ソーラ
１９９７年	ＪＦＬ１２位	朴景浩　監督　途中交代	朝日ソーラ
１９９８年	ＪＦＬ６位（芝練習場）	フォルミーガ監督	ペイントハウス
１９９９年	Ｊ２　３位	石崎　監督	ペイントハウス
２０００年	Ｊ２　３位	石崎　督	ペイントハウス
２００１年	Ｊ２　６位	石崎　監督　→　小林監督	ペイントハウス
２００２年	Ｊ２　１位	小林　監督　　２００２年Ｗ杯	ペイントハウス
２００３年	Ｊ１　１４位	小林　監督	ペンタくん
２００４年	Ｊ１　１３位	ハンベルガー　監督	ペンタくん
２００５年	Ｊ１　１１位	皇甫官　監督　→　シャムスカ　監督	マルハン
２００６年	Ｊ１　８位	シャムスカ　監督	マルハン
２００７年	Ｊ１　１４位	シャムスカ　監督	胸なし
２００８年	Ｊ１　４位	シャムスカ　監督	胸なし
		ナビスコ優勝！	

☆　１９９３年　Ｊリーグが発足した時、このクラブは存在していなかった。

☆　大分県人口１２０万、大分市人口４７万人

　クラブができて１５年目のナビスコ優勝

☆　原動力・・もちろん機関車パワーの社長がいなければここまでこなかった。

・・・が・一人では限界・・多くの方々が支え続けてきた。

サポータ、スポンサー、後援会、ボランティア・・・

観客推移　３人　→　百人　→　５百人　→　千人　→　３千人　→　５千人

→７千人　→　１万人　→　１万５千人　→　２万人　→　３万人

☆　サッカーというスポーツを見ることが珍しい県だった。

「ワールドカップちゃ、なんな？」

戦前は旧制中学・師範学校程度。戦後は高校サッカー・・弱かった。

・・・サッカーの未開拓な県だった。

☆　知れ渡るだけでは県民はスタジアムに足を運ばない

→　勝利が必要！

火を燃やすには毎日の地道な地域活動（燃やす蒔や炭を準備しておく）が鍵になる。
着火はビッグな試合での勝利＆優勝・・これで観客が増える。

☆　いつでも強い上昇志向の熱い社長がいる。
ある意味、無鉄砲、リスク承知で投資にいく、守りはない　→上へ上へ
・型破り・変人・奇人・夢を語れない人はやめた方がよい
・スポーツクラブ運営は厳しい
・「常識的な話ならば止めたほうがよい」
・２０億ラインはＪ１残留の最低ライン
・経営　・強化＆育成　・地域貢献が柱

☆　地方でのＪクラブ
選手補強　→　経済的な裏付け　→　これが１番の悩み。
大分の主力であるエジミウソン、ホベルト、鈴木は昨年途中補強した選手。
ナビスコ優勝の縁の下で経済的支援の「マルハン」の影響は大。

貧しいＪリーグ・・給料１０万～２０万ではプロではないのでは・・(夢の道)
このままでは資金の流れが滞る。
→　もっとスポーツ界全体で資金が回るような仕組み作りを考える必要がある。（Ｅｘ）法制度の改正、ｔｏｔｏの更なるＶ・ｕｐ、

☆　学校スポーツの日本一・・その後・・未来へ続く道を！
甲子園、サッカー、ラグビー・・多くの日本一が毎年誕生している。しかし、その後、その優勝は未来につながっているのか？
→　優勝パレード、褒め称え、優勝記念碑を建てるのみではなく、もっと未来につながる施策が欲しい。スポーツはもっと大きな力を持っているのではないか。
我々はその術を知らないのではないか。

☆　スポーツ産業学会、フットボール学会、スポーツ社会学会、などはもっと表に出てきて提案をしていくべきではないか。

2011年Ｊリーグ昇格を目指して！

守屋　実（ＦＣ町田ゼルビア代表）

□はじめに

みなさん、こんにちは。ＦＣ町田ゼルビアの代表をしております守屋と申します。ゼルビアの代表といいましても、小学校の教員をしています。サッカーに携わるようになって、教員になったという縁があって、まだ現役で３年生を教えています。

いま宇都宮さんの話にあったように、地域リーグ決勝大会が鳥取であったのですが、私は行っていないんですよね。学芸会だったんです。携帯をみながら、「どうしているんだ！負けてる、負けてる」と不安だったんですよ。最後の１分前まで負けていたんですよ。それで戸塚監督が最後パワープレーでなりふり構わずやって、やっと追いつき、勝ちました。

昨年は私が監督で出ていましたので、地域リーグ決勝大会の厳しさは重々知っています。昨年は開始２分で点を取られて、それですべてが終わりました。本当に力も出せずに終わっちゃったなということで、大変悔しい思いをしましたけども、今年は逆に結果を出せて、嬉しいというよりも、それよりも肩の荷が下りたという方が正直なところで、どっと疲れが出ました。

●守屋氏と町田の関係

早速話に入っていきたいと思いますが、実は私は 20 歳のときから町田のサッカーに携わっております。ですから、今年で 39 年になるんですけど、ゼルビアの代表ということで、何かを仕掛けてこうなったというのではなく、その頃教員を中心にして少年サッカーが一気に広がったんですね。私の地域も全くサッカーなんてなかったです。だから、私の義理の兄というのが、私の前のサッカー協会の理事長なんですけど、地域にサッカークラブを作ろうということで、私も一緒に始めました。その縁で、ここまで来てしまいました。

残念ながら、町田にはいま、その頃の残党はおりません。運良くあちこちに飛ばずに町田に残れたものですから、ずっと今までやってきました。

それで、Ｊリーグを、というよりかは、やっぱり私がこのタイトルにしたのは、ゼルビアを通して、先ほどの宇都宮さんの話にあったように、街を作っていこうということをここ何年もやってきました。その話を中心に話をさせていただきます。

□設立趣旨

これは（スライド省略）ＮＰＯを立ち上げたときの、設立趣旨の文章です。私は 11 年間町田のサッカー協会の理事長をしておりました。正直に言いまして、私が強烈なリーダーシップを取っていくタイプではないので、やっぱり協会の中というのは難しかったです。

そのころ、ゼルビアがどうだったかというと、東京都リーグの１部をさまよっていたというときでした。そこで、何か組織的な対応をしなければならないだろうということで、サッカー協会の理事長をしながら、「ＮＰＯ法人アスレチッククラブ町田」というのを立ち上げました。

その強烈な想いがどこから来たかというと、ずっと私は中学生を連れて、韓国に３年間、イタリアに４年間連れて行きました。戸田という、ワールドカップに出た選手が中学２年生のときには韓国に行きました。これからの子どもたちは、世界のサッカーを肌で感じなければならないだろう、ということで始めたんですけど、韓国は私の雰囲気に合いませんでした。そこでイタリアに行ったら、その雰囲気を大変気に入りました。そのときに、中学生を連れていろいろと歩くと、どんな田舎の町にも小さなクラブがあって、そこを応援するサポーターがいました。ぼくが行ったところは、セリエＣ１の「ビッテルベーゼ」というところでした。みんな自分たちのクラブに誇りを持っていました。スタジアムには、全部小さな広告の枠でいっぱいになっており、「いいな」と思っていました。

□ＡＣ町田ゼルビア

●チームの現状

そういうときに町田の理事長をしながら、どうしてもそういう、みんなが憧れる、私たちがサッカーの街として呼べるような、そんな応援できる「おらが街のクラブ」を作りたいなと強く思いました。

それと、町田の中でプロクラブがほしいという流れがあったものですから、応援に来ていた小森という人間に頼んで、「アスレチッククラブ町田」を立ち上げました。

町田はこういう形で進んでいきました。1990 年に、当時は「ＦＣ町田」と呼んでいたんですが、町田の社会人チームに声をかけて、町田のトップチームを作りますよ、ということで作ったのがＦＣ町田です。

それが、このような形で上がっていきました。東京都１部リーグというのが一番長かったです。東京都１部で、正直トップチームを作ろうよということで作ったんですけど、選手にお任せという感じでした。何もしない。私も理事長をしていましたが、特に力を貸してあげられないというのが、本当のところです。

ところがワールドカップがあったときに、奇跡的に東京都１部に残ることができたんですね。勝点１くらいの差でした。それで、解散するのかしないのか、誰が引き受けるのかという話になりまして、何回か協会としても会合を持ったんですけど、選手が自分勝手にやっていて言うことを聞きませんでしたので、監督を引き受けてくれた何名もの方が辞めてしまうのです。その頃私は理事長をして、何もしていなかったので、もう１つ、私が教えていたジュニアユースの子どもたちの卒業生がここに集まっていたもので、責任上私がやってみるかということで引き受けました。

その後の改革については、後ほどお話しします。

●少年サッカーの町としての歴史

ＦＣ町田の全体は次のようなものです。町田のことをご存じの方もいると思うのですが、町田はとにかく少年サッカー、ジュニアから始まりました（1977 年）。先ほど話した通り、教員が中心になってです。それで、ＦＣ町田というのは、堀田先生のやっている清水を追い越せということで頑張りました。そして、全日本少年サッカー大会で優勝とかしました。

その卒業生たちを中心に、ＦＣ町田ジュニアユースというのを作りました。発足から私が代表監督をしていましたけども、その中でいろんな選手が出てきました。ジュニアについては、何年かやった後に東京都の方から「選抜チームはまずいんじゃないか」ということで、町田としてのある成果は出たので止めようということになりました。

終わりになってしまい、全国に行けなくなったということもあって、正式に 1985 年にジュニアユースを立ち上げました。その前から私が、７、８年前の 1978 年から、ジュニアの卒業生を中心にトレーニングセンターという形でやっていましたけど、正式にクラブとして発足したのが 1985 年です。ここでも残念ながら、全国１位にはなれませんでしたけど、全国大会に９年連続で出たりとか、一定の成果を上げました。

ユースもすぐに発足し、その後トップという形はできたのですが、これは全く個人商店のようなもので、１つの流れには入っているけど、ばらばらという形でした。これは重田先生が、街のクラブというのはトップまでできて本当だ、ということで。でもそのときの重田先生は、とても遠大な目標を持っていらっしゃったので、それぞれ作ったのですが、全然ばらばらにやってきたというところでした。

けれど、いまはこの形がしっかりしてきました。はじめて、少年から始まってＪを目指すクラブということで、ここまでやってきたと思います。

●サッカーフェスティバル

ゼルビアがどうしてこのような形でいまがあるのかと言いますと、町田の中でいろんな歴史があります。先ほどの話のように、少年サッカーの街ということで歴史があります。それから、ご存じの方もいると思いますが、神奈川県の境で、東京のベッドタウンで、いろんなところに住んでいた人が移り住んできた人がほとんどです。何とかおれたちの街だ、郷土意識を持ってほしいという想いが常にありました。

それから、いろんなそういう願いの中で、今年で 17 回になるんですけど、サッカーフェスティバルを始めました。これはヴァンフォーレ甲府にいる林健太郎が、彼らが中学３年のときはなかなか良いチームだったのですが、白馬の大会で失点０で負けちゃったんですね。そのときの解散のときに、みんなが 20 歳になったときに、町田のＯＢが集まる大会をしよう、という形で別れました。梅沢というフリューゲルスにいた良い選手がいたんですけど、そういう連中とまた会おうということになりました。町田出身のＯＢ、北沢選手、藤吉選手などのＪリーガーを集めて、町田にはＪクラブがないですから、町田の人がその代わりに応援することで郷土意識を持ってほしい、ということで始めたのがサッカーフェスティバルです。

数えたら、34 名のＪリーガーが町田から出ているそうです。そういう人たちを町田に集めてやろうと。ただ、これにもいろいろありまして、２、３回目にサッカーフェスティバ

ルをしましたら、Ｊリーグの方からお咎めがきました。「けしからん、勝手に地域でそういうことをして」と。確かに手続きも何もしないでいきなりやりましたからね。それで、東京都の川口理事長と一緒に行って、大変申し訳ありませんでしたと言い、始末書を書いてきました。

ところがこれが不思議なことに、途中から旗色が変わって、とても良い試みだと。地域の人たちに密着した大会は良い、と今度は褒められるようになりました。

そのときに、Ｊリーグバブルというのを、私もよく知っていました。それがいまの活動と関係があると思います。その頃、北沢選手が来たときには、みんなが囲んでしまい、「どいて、どいて」って本当にそういう感じでした。本当にこれが地域密着なのかなと思いながらやってきたんです。

●郷土意識の欠如

実はＪリーグのクラブの誘致ということもやりました。これはフリューゲルスといって、なくなったチームがあるんですけど、あそこは横浜では後発のチームで、ホームタウンとしては弱く、町田に来たいという話が持ち上がりました。私は強化普及部の代表をしていましたので、フリューゲルスの方と会って、ある程度話が進んでいたんです。ここにクラブハウスを作って、など。でも、それはＪリーグバブルの頃ですから、町田の規模の行政では乗り切れませんでした。

それ以外にも一生懸命誘致しようということで、いまでいうとフロンターレですが、富士通に行って、国会議員を通して誘致ということも考えました。でも、なかなか簡単に誘致なんてできるものではありませんね。

その中で出てきたのが、自前で作ろうということです。自前で何を作るかというと、さっき言った町田のトップチームとして作ったゼルビアを育てようということになりました。その時点でゼルビアという名前に変えました。町田市の木のゼルコバ（zelkova：ケヤキ）と、花のサルビアをくっつけました。

ここからＪを目指そうかということでスタートしました。

●ＦＣ町田の強化

ところが、先ほども言った通り、理念だけはあったのですが、残念ながら理念とは、人が実行していかなければならないわけで、結局最低のところまでいってはじめて、私も携わるようになったわけなんですけど、やっぱり目標・理念を見直そうということで、きちんと私たちが目指すところを見据えました。

それまでサッカー協会が対応していたんですけど、サッカー協会では無理だということで、６年前にＮＰＯ法人アスレチッククラブ町田を作り、協会の方からＮＰＯの方に業務委託という形で、ＮＰＯの方でトップチームの強化を行うようになりました。その時点では下部組織は入っていません。それで、チーム再建がなぜできたと考えたときに、私は遠大なことを考えられる人間ではないのですが、目の前にあるものを何とかしたいと一歩一歩進んでいった感じです。グローバルな考え方はできませんが、やったら負けたくない、何とかしたいというのが正直なところで、本当に１つ飛び越え、２つ飛び越えてやってい

きました。

一番大きな理由は、町田のサッカーの先人たちが作ってきた理念を絶対に崩すまいというのがことです。次に、やはり人だと思うんですよね。先ほど小森という人間を出しましたけど、狂気の人間で、熱かったです。そういう人間に助けられ、そして 2002 年のワールドカップのときですが、最初私が引き受けたときは、練習に行くと、最低で私ともう１人の２人のときがありました。いい番組とか、何かあると来ないんですね。もしくは、今日は用事があるからといって、練習の途中で帰っちゃうとか、そんな人間ばかりでした。

それで、もう一回立て直そうということで、神奈川県の高校選手権ベスト４や東京都のベスト４に出るような、うちの卒業生を集めました。大学に行ってやるのかどうかを聞いて、やらないならうちでやろうと誘い、７、８人、私の最初のときに入れました。その後変わってきたのは、竹中という選手が入ったことです。彼は、日本でＪリーガーの夢が叶わず、リトアニアでプロをやり、日本に戻って横浜ＦＣを１年で解雇された人間です。これもすごく熱い人間なんですよね。私なんかプロ経験もないし、じゃあ彼を現場の中心に据えようと。なかなかいい顔はしなかったのですが、半分騙して口説き落として、連れてきました。それで彼は、「やっぱりこれじゃあ無理ですよ」と言って、どんどん現場を変えていこうということで、練習を増やしましょうとか、いろんな意味でふるいをかけました。すると、どんどん辞めていっちゃいますね、厳しいから。

その中で、次に考えたのはＪリーグの選手。Ｊリーグの選手で、セカンドキャリアで大学に戻る人を狙いました。それで４人くらい集めました。津田というのは町田出身で、ヴァンフォーレでアウトになりました。一番最初は杉本といって、湘南の子です。花火職人をやっているのを聞きまして、グラウンドに呼んできて、やろうと。なかなかウンとは言いませんでした。みんな慎重なんですよね。最後は谷川くんといって、清水でやっていた選手で、沼津まで口説きに行きました。彼もしばらく様子を見させてくれと言って、６月くらいまで入ってきませんでした。これが一番安くて、お金がかからなくて、交通費だけ出せばいいやと。それで呼んできました。

あとは雇用先ですね。いろんな町田の会社にお願いして、選手を雇ってもらいました。去年で 12 社、18 人を雇ってもらっています。去年から昼間練習を３回やっていますが、それにもＯＫしてくれる。それから、今回の石垣島の件も、あれだけ休ませてくれる会社はなかなかありませんよ。戻ってきてからもちゃんと職があるような環境を作りました。今後そのような形が取れるかどうかは、また変わってくるはずですけど、それまではそういう形で乗り切りました。

こうやって人を集めること、それから継続してきたこと。それしかないですね。３つのキーワードを挙げるとすれば、「理念・人・継続」だと思います。

あと、大事にしていたのが地域貢献です。なぜ地域貢献にしたのかというと、私たちははっきり言って何もなかったんですよ。お金もない、看板もない、何もない。その中でどうやってこのチームが上に行くかと考えたときに、やっぱり「ゼルビアがあって良かった」と思ってもらうことしかなかったんですよね。それが地域貢献です。

□チーム・ＡＣ町田・株式会社ゼルビアの歴史

●ＮＰＯ法人ＡＣ町田の歴史

ＮＰＯ法人アスレチッククラブ町田は、６年前に作りました。それから株式会社ゼルビア。これは、去年刈谷で負けまして、その後応援してくれる社長さんと話をしたときに、やっぱりもっと専門的な形でやっていこうというところで決めたんですけど、非常に怖かったです。私が作ったチームではないし、ここまで来たチームを、ある方の考えで変わっていくというのが、すごく恐ろしかったですね。なかなか踏ん切りがつきませんでした。

それで、株式会社を作るときに準備委員会を作りました。その中で、このように訴えました。前段はカットしてちょっと読んでみます。これはゼルビアの準備委員会に寄せてという中で、

> 「しかし、運営組織の株式会社化は、単なる一企業を起業することとは違うと思っております。それは、このチームの設立の基本理念から考えれば明らかです。町田サッカー協会が、地域を代表するサッカークラブ、市民の希望や誇りとなるサッカークラブを標榜し、設立したクラブがゼルビアです。こうしてまかれた種が芽を出し、少しずつ成長を遂げたのが、今のゼルビアです。現在ではゼルビアは単なる一クラブではなくなり、地域や市民の財産となってきたのです。そしてまた、チームの運営は町田サッカー協会からＡＣ町田（ＮＰＯ法人アスレチッククラブ町田）が業務委託され、運営してきました。したがって、このゼルビアの設立の趣旨や運営の流れが大きく変わってきてしまうような改革は、私は考えていませんし、もしそのようなことがあったのならゼルビアは別のクラブになってしまいます。チームの歴史的背景や、設立趣旨を逸脱していくのであれば、組織の改革はやらない方が良いとさえ思っております」

これからも続くのですが、やはり理念をもう１回確認して、その上で協力してくれるのかということで株式会社を作りました。

現在のゼルビアは、練習を週５回やっています。午前練習が３回、夜間が２回です。それまでは、全国一恵まれないチームだったと思います。本当に小山ＦＣといって、自分たちが作った小さな少年がやるようなクラブで、練習が８時から始まります。ナイターも自分たちで作りました。クラブハウスも自分たちで作りました。そういう全くの自前のところを作りながら、寒い中、夜に練習するんですね。ぼくは、よくぞやってくれたなと、本当に思っています。ここまで支えた選手については、本当に誇りに思います。だから、ゼルビアのＤＮＡというのは、今後も引き継いでいきたいなと思っています。すべて恵まれているところでやるサッカーよりも、厳しい中で好きなもののために一生懸命できるというのは、どんなプロ選手になろうとも必要なことだと思っております。よくパトカーが、そろそろ止めて下さいと、11 時くらいになったら来るんですね。何度も謝ったことがあるんですけど、本当に“恵まれなさ”でいえば、誇りになるくらい恵まれていませんでした。

いまもヴェルディの人工芝を借りたりしながらやっていますが、ずいぶんと変わりました。野津田陸上競技場の芝生の練習場を、週に１回だけ借りています。

あとは、サポートクラブが 1,400 名で、協賛社が 170 社くらいあります。

●ＮＰＯ法人ＡＣ町田が目指すこと

ゼルビアを地域・市民の財産に、というのが私の考えです。ゼルビアは地域総合型スポーツクラブを作りましょう、子どもたちに夢と感動を与えましょう、それから地域のスポーツ環境の改善・推進に協力しましょう、郷土意識を高め活気あるまちづくりに貢献しましょう、このようなことをクラブミッションという形で進めています。

本当にいろいろなことをやってきました。町田にプロサッカークラブを持参する運動、養護学校や施設の子とのスポーツ交流、学校の校庭芝生化、サッカースクールの開催、下部組織の運営、バスケット教室の開催、キッズチアリーディング教室の開催、ふれあいサッカー教室ちびっ子カップの開催、巡回サッカー教室の開催、選手たちに社会人講師として学校の授業に参加してもらう、それからイベントに参加、アンチエイジング、英語サッカー教室…これは私のアイデアでやったんですけど、２人くらい英国人を雇ったのですが、客が来なくて潰れました。それから女子サッカー。これからきちんとした中学生レベルからの、町田ゼルビアの女子サッカーチームは作っていきます。

これはうちの学校の芝生です。これはうちの選手たちと一緒に植えました。これのおかげで、来年うちは全校芝生化になりました。

こんなふうに遊ぶんですね。ゼルビアとしても、このようなフットボールパークを作りたいと考えているんですよね。

これがマラソン大会です。これは一昨年から出ているんですけど、今年で４回目ですね。子どもたちは、ゼルビアの選手たちをまるでプロのように思ってくれているんですよね。だから、町田に来たらヴェルディよりもゼルビアの方が有名です。

これはふれあいサッカー教室で、試合が終わった後、来た子どもたちが練習をします。サッカーを教えるというよりかは、芝生の上で楽しく体を動かしてほしいということです。

これは、負けた後もやらなければならないんです。選手は弁当も食わないし、出ていた選手も本当に辛いと思います。でも、これをやらないとゼルビアの選手ではないんです。嫌なら辞めてほしいというということで、やっています。

これは今年で３，４年目になると思うのですが、私が小学校の教員をやっているものですから、小学校を回っています。2009 年度は、全校に回りたいなと思っています。最初の年に、1,300 名くらいがやりました。本当に女の先生たちが冬場のサッカーといって大喜びをしていますし、子どもたちもすごく喜んでいます。

これは、Ｊよりも早かったと思います。竹中くんが来た５年前に始めました。子どもたちって、近くに夢をえがけないんですよ。サッカーフェスティバルもそうなんでけど、近くに夢の具体像があるというのは、すごく大きいんですよ。やはり少し離れていたり、バーチャルなものというのは、子どもたちは夢をえがけないんですよ。やっぱり、近くのお兄ちゃんというのがすごく大事なんですよ。

ゼルビアは「近くの」というのを大事にしていますけど、竹中くんに「夢に向かって」という題で、リトアニアとかで自分の夢を叶えるまでの話をしてもらいました。去年は酒井良くんがしょっちゅう首を切られていたので、「挫折から学ぶこと」という題でやりましたけど、良くんなんかはすごくいい話をしていましたよ。「最悪のことを考えれば、人生何でも平気だと」。子どもたちは、そういう近くにいる大人がそういうことを話す、ということがすごく大事かなと思っています。ＰＴＡからも要望があって、すごく受けています。

これはキッズチアです。ハーフタイムとかにやっていますけど、女の子たちに運動の機会をということで、受けています。すごい人気です。今後教室を増やそうと思っています。

アンチエイジングもやっています。これは無理じゃないかと私は言ったんですけど、すぐに満員になります。やっぱり選手たちがやっていますし、いつまでも運動したい、芝生の上でやりたいということで、すごく好評なんですよ。これは驚きました。

●広報活動

うちの広報活動なんですけど、全国紙もありますけど、タウン誌というのが大きいですね。タウンニュースというのが、ずっと取材をしてくれていまして、大変大きいです。

その次に大きかったのは、朝日新聞の販売所があるんですけど、そこの朝便りというのがあって、そこで６万部が入るわけです。月に２回くらい入るし、そういうのもすごく大きいです。

それに、どこでもやっているとは思いますが、Ｊ．ＣＯＭが大変応援してくれています。東京都リーグの頃から、Ｊ．ＣＯＭは地域のことということで使ってくれています。

あとはスタジアム運営で、いろんな団体と一緒になって、例えば、消防署、その他町田で活躍する人たちにハーフタイムに来てもらって、様々なことをしています。私よりも運営をしている人間の方が詳しいですけど。

昨年のホームゲームです（写真略）。これをもっと増やしていかなければならないと思っていますが、昨年はすごく雨が多かったですね。でもその割には、よく来てくれて。最初のゼルビアの頃は、私の兄弟だけが応援に来て、全部で８人というときもありました。そういう時代から、こんなに増えて信じられないな、と思っています。

自販機はどこでもやっていますが、町田市に応援をお願いして、各施設に入れていきたいなと思っています。今は 30 数台ですね。これはすごく儲かるんですね。

□ゼルビアの課題

課題ということでは、どうしても経済的なことというのが大きいですね。今までは１億もかからず、ウン千万でやっていたのが、今年から１億、来年からは１億 5,000 万、さらにＪ２にいけば数億という形でいくわけですから、しっかりやっていかなければならないなと。この前準加盟申請をした後にＪリーグの方が町田に視察に来てくださいましたけど、私たちもやはり安定経営をしなければならないと思いますので、大変頭が痛いところです。

それから、行政からの強力な支援。これは大きく変わりました。それは町田が都市イメージを上げたいと市長が考えているんです。そのために、「ゼルビア、ゼルビア」と。これまではそうでなかったのが、ビックリするくらい変わりました。市長の挨拶だけではなくて、町田青年会議所とか、いろんな団体の年頭の挨拶にゼルビアが４つか５つ出ていました。現金なもので、強くなったらこうなるのかなとも思うのですが、ただいいイメージとして利用していただくのは、いいことだと思っております。でも、市長が替わったらどうなってしまうのかとか思いますけど。

あとは、専用グラウンドの確保ということですが、正規のグラウンド２面が取れるような土地を確保できそうです。ただ、どう考えても専用の練習場を作るには１億くらいかかりますね。でも、何とかしたいなとは考えています。

それから、準加盟申請が済みまして、２月 11 日に決定が出るわけなんですけど、来年うちは絶対上がろうとは思っていません。上がって苦労しているＪ２をみていますから、それよりも足元を固めたいと思っています。上がれれば上がった方が良いと思うし、だからそのためにも準加盟申請はしておこうと。それから体力をつけようと。こういうステップです。

あとは、いろんな人がスポーツを楽しめる環境を作っていきたいなと考えています。

それと、観客増員。今年ＪＦＬから 4,000 名を動員しなさいと言われています。ノルマになっていますけど、これから作戦を考えていきます。うちは、ＪＦＬに上がることだけ必死だったので、その後のことは今急ピッチでやっています。

●将来展望

スタジアム改修です。議会で通ればということで、改修されます。今のところ 1,200 くらいのスタンドなんですが、それを１万へと、9,000 ほどの仮設スタンドを作りますということです。

2010 年にＪＦＬ４位以内に入って、Ｊ２昇格と。私たちは実は、Ｊで成功するクラブを作らなければならないと考えています。それには駅近の総合スタジアムしかないなと。いまの野津田競技場というのは、駅から遠いんですよね。駐車場も少ないんです。それで、なんとかＪ２に上がって、あそこじゃ困るねという形にしていきたいと。だから 2009 年に直すスタジアムは、ボロでいいんです。あまり良いのを作られてしまって、あとは作りませんというのでは困るので、できるだけ抑えてやって、いろんな問題が起きて、ここじゃダメだというようにしないといけないんです。客が来すぎて困っちゃう、ということを仕掛けていこうと考えています。そしてそれができて初めてＪ１だね、というのが将来展望です。

いまの町田がどうなっているかというと、こんな感じです。お客が２、３人しか来ない時代から、実はいま、町田市がそういうことで、町田の一番の繁華街の駅から駅をつなぐところでこんな形で横断幕を出してくれています。それから、タペストリーも商店街にいっぱい出ています。学校にも全部送られてきています。このような形でいま町田市は、ゼルビアを使った形でまちづくりを行っていこうと、行政も考えるようになっています。もちろん、今のスポーツ課長というのは、ゼルビアを作った１人ですから、ちょうどいい人がなったと思いますし、それも市長の作戦かなとも思いますけど、町田は変わりつつあります。

あとは、指定管理を取れました。他のところとタイアップをしてやったものですから、それがどれだけ私たちのプラスになるか分かりません。ただ、人工芝一面のクラブハウスつきの１つは、ゼルビアが使えることになっています。

それから、お酒を作って売り出しています。「夢かたり」「夢さそい」「夢おこし」です。それからビールも販売しています。

エンブレムも新しくなりました。これまでは私たちが考えた大変ローカルなものでしたけど、今度はプロが考えて、スッキリして新しい船出にふさわしいかなと思っています。

それから、変わったところで進んでいることでは、町田の商店連合会で、「好きだ、町田カード」、「好き町カード」というのですが、その会員カードとゼルビアのカードが一緒になりました。これでポイントが貯まる良さもあるんですけど、それだけではなくて、誰が来ているかということをすべてチェックできるんですね。観客の調査もできます。

それからＪ．ＣＯＭで、これまでは町田と川崎の話題の１つとしてゼルビアが取り上げられていましたが、今度は 15 分番組で「頑張れゼルビア」というのができます。

スタジアムの改修は、お話しした通りです。

商店街連合会と合同で、ポスターも作ります。

それと、年金支払い済みというポスターが８万通くらい町田市内に渡るんですが、その全部の封筒に、町田にＪがいるという形で全部印刷されます。どこに町田にＪがいるか、クイズみたいなものですが、おわかりになりますか。後でお考えください。

あとは、ＦＭゼルビアというのを、2011 年あたりに立ち上げようというふうに考えています。これも研究委員会が立ち上がったところです。

●今後の課題

お話を聞いていてお分かりだと思いますが、最近一気に加速度的にきたので、正直体制作りができていません。ですから、新年度体制作りをしっかりしていこうというのが、今の課題です。地域リーグ決勝大会の石垣島決戦で 1,000 万円くらいかかりましたが、800 万円から 900 万円はパーティー券で、政治家のようなことをして売り上げました。ぼくらも 20 枚､30 枚売ってこいと渡されるわけなんですけど､よくぞ乗り切ったなと思います。

でも来年はできません。こんなことを２、３年やっていたら、地域の信頼はなくなります。だから本当によかったな、と心から思っています。ですが、こういう形で一気に来たものですから、とにかくＪに上がるためには１回立ち止まって体制作りをしようかなと思っております。株式会社化して、専任のスタッフを置いていますし、ここから浸透した体制を作り、Ｊに上がってからもやっていけるようなクラブを作ろうと、そしてＪで成功するクラブ作りをするのだというのが新年度の目標です｡プロ選手は昨年よりも減りました。それでも、選手も人間ですから、どんな良いチームにするかで変わってくると思います。

ぜひ 2009 年度のゼルビアの活動をみていただきたいと思います。本当にこれはスポーツ文化だと思っております｡私が高校生のときに､重田理事長が｢スポーツは文化だ｣と、何十年も前におっしゃっていましたが、その当時スポーツを文化だと言える人はそれほどいませんでした。文化というのは、人から人へと伝えるのだと、サッカーの楽しさは私たちが伝えていくのだ、ということをずっと言っていました。これはサッカーだけでなく、体を動かすスポーツの楽しさを、私は地域の１人としてゼルビアを通して広めていきたいと思っております。

ということで、ゼルビアは町田の財産にしていこう、そして「まちに元気、こどもたちに夢と希望を運びます」というキャッチフレーズでこれからもやっていきたいと思っております。その結果Ｊに上がれれば嬉しいことです。頑張りたいと思います。よろしくお願いします。終わります。

中塚：ありがとうございます。立ち上げのところから、将来の展望までお話しいただきました。進行の関係で質問の時間が取れませんので、皆さんお手元の紙に思いついたことがありましたらお書きください。

第２部　ディスカッション

中塚：それでは後半戦を始めます。前半戦で質問できなかったこと、あるいはお互いもう少し突っ込みたいことを中心に取り上げていきたいと思います。
前半戦ではお三方にプレゼンをしていただいたのですが、お聞きいただいてわかるように、町田の話と大分の話はつながっています。もちろん、取材者の立場でいろんな地域をご覧になった宇都宮さんも、さまざまなケースをご存じです。
はじめにゼルビアの守屋さんから、大分の宮明さんの話を聞いての感想や、いま町田が抱えている問題をいくつか示して宮明さんに振っていただきます。それに対して宮明さんから、お答えや、町田に対するサジェスチョンをちょうだいします。さらに、大分もいま、地方で苦しんでいることがあるのではないかと思いますので、その辺りをご紹介いただき、宇都宮さんからコメントをちょうだいします。最後はフロア全体で、フリーで意見交換ができればと思います。では、守屋さんお願いします。

□地域のクラブ運営

●地域密着の重要性

守屋：やはり大分をみていて、また自分でやっていて、意外とローカルなものはすごく受けますよね。けど狭い地域、つまり自分の地域に誇りが持てない人たちがすごくいると思うんです。町田の場合は「西の歌舞伎町」ですから、その中で「これが町田だよ」っていうものを、なかなか胸を張って言えないといころがあります。大分をみていると、お年寄りたちも「自分たちは大分県民だ」と胸を張って言えている。
やはり社長だけではなく、いま考えると、結果もすごく大きかったと思うんですけど、それ以外にいろんな仕掛けがあったと思うんですよね。たまたまそれが結果という形で結実したわけですけど、それ以外に、弱い頃から耕し続けてきたものがここで実ったと思うんですよ。ただ強いだけだと、某チームみたいに、弱くなったらもう誰もみてくれない。ですからそうじゃなくて、本当にそのチームを自分のチームなんだとしていくための耕しがあったはずですが、それを聞かせていただけたらいいなと思います。

宮明：私はボランティアをやり、またクラブができたときにはゴール裏のサポーターの顧問をやらせていただきました。ＪＦＬ、Ｊ２の最初の頃というのはお客さんも少なくて、どうしたらお客さんが入るだろうかと思っていましたが、やはり一番のターニングポイントになったのは、2002 年に大分でワールドカップがあったということです。これが大きかったです。Ｊ２時代に 3,000 人くらいのお客さんが入っていて、Ｊ１に上がったら 10,000 人の大台を超えてきました。ＪＦＬの頃は 80 人とか 30 人のときもありました。お客さんというのは一気には増えないんですよね。やはり地域活動が大切です。
大分には後援会というのがあるんです、このクラブを応援しようという。郡や市全部に

支部を順番に作っていったんです。それで、１人 1,000 円から募金を受け入れますと。それで後援会員になれますよと。後援会員になれば、グッズを何割引で買えますよということで、それが大分県内のほとんどの市町村にできてきたんです。ですから、あとは市町村で、今日はこの市町村の方々の、例えば北の方に中津市というところがあるのですが、今日は中津デーにしようということで。そうすると、中津の人は無料で、バスでみんな来るわけです。バス代だけで、入場料を取らずにする。スタジアムに来ると、「今日は中津の皆さんです！」と紹介したりする。
あと、大分は地域と「ど密着宣言」というものをしているんです。その中で、いま言ったことなどをいろいろとやっています。例えば、夜８時から素人サッカー教室、おじちゃんサッカー教室。そういったことを、地道にやっています。その他には、商店街に、シーズン前に選手が「今年もよろしくお願いします」と言って回ったりしています。できることは何でもやっていますよね。
昨日社長に、もうちょっと花火を打ち上げた方がいいんじゃないのと言って、文化会館を借りて社長以下選手も全員入れて、サポーターが 2~3,000 人入ってもらって、そこでみんなで景気よく、今シーズンどう戦うかっていうのをやろうよ、と言いました。そしたらすぐその場で場所を取って企画していました。そのくらい社長は決断が早いです。これがいいといったら、その場ですぐに電話をかけ出して、空いているから企画を頼む、ってことになったんです。すごく行動が早いんです。
そういったことをやっていて、はじめて「勝つ」と薪が燃え出すというところがあると思うんですよね。だから、薪を一生懸命用意しておいて、最後は勝負になってきて、勝つとお客さんは入ります。ここのところは絶対に外せないと思うんですよね、勝負の世界である以上。

●クラブの決裁権

中塚：大分の場合は、行動力や人脈というのを全部含めて、決裁権を持っている社長の影響力が大きいようですね。では町田の場合は、例えば同じような提案がなされたときに、判断する方はどなたになるのでしょうか。その辺りの組織の現状と、今後の見通しを語っていただけますか。

守屋：町田の場合は、ゼルビアグループというＮＰＯがあります。私は教員ですので、株式会社の役員はやれませんので、株式会社は町田の少年団出身で、町田で起業している方に社長をお願いしています。その社長と、私と、ＮＰＯの副理事長、それから全権で統括部長をしている、株式会社の部長をしている者と４人で最高幹部会という形で。それは、株式会社の取締役会の上にあります。そこがほとんどのことを、この４人で最高幹部会という形で決めています。あとは、ＮＰＯはＮＰＯの組織、そういったものを統括するのが、最高幹部会です。そこが意志決定機関の最高のところですね。

中塚：大分はどうですか。最終決定は社長でしょうけど、そこに進言するブレーン集団というものはあるのですか。

宮明：強化部長、広報部長、総務部長、営業部長と副社長の皇甫さんの５人くらいですかね。この５人と社長を入れて、ものごとのほとんどが決まっていきますね。

●クラブ経営の難しさ

中塚：宇都宮さん、ここまで町田の話と大分の話を踏まえて、地域で起きているムーブメントが、どういうところに結実していったらいいのでしょうか。そうしたビジョンも含めて、宇都宮さんの見解を聞かせていただきたいのですか。

宇都宮：町田の話にも「人」というのがあったと思いますが、「人」の重要性がすごく大きいと思います。特にチームの立ち上げ、あるいは都道府県リーグ、地域リーグから上に上がっていこうとしているときにおいて、チームを誰が引っ張るのか、どんな人がチームを引っ張っていくのか。これは選手や監督ではなく、フロントであったり社長であったりするわけなんですけど、その人の能力と自己犠牲と、その人が持っている運を引き寄せる力に大きなウェートが占められていると思います。

大分の溝畑社長に昨年一度インタビューをさせていただいたことがあるのですが、そういう力をすごく感じました。また、今日のプレゼンでたびたび出てきたファジアーノ岡山の木村社長。この人はゴールドマン・サックスで 35 歳で執行役員をやっていたような人なんですけど、東京の家を売り払い、故郷の岡山に帰って、それまで 500 億円のお金を動かしていた人が、50 万円のお金のために頭を下げまくっています。こういうことって普通の人はできないと思うんですよね。言葉は極端ですが、狂気じみた情熱を持った人が 1 人いるかいないか。そして、いたとしてもその人がどれだけ運を引き寄せたり、お金を引っ張って来られたり、選手に恵まれたり、サポーターに恵まれたり、行政に恵まれたり、というところに非常に左右されると感じます。

逆に、今までみてきたチームの中で、こういったキーマンとなる人、チームを引っ張っていける人がいないチームは、やっぱり厳しいと言わざるを得ないです。

ただ、一方で思うんですけど、そういう社長さんたちをみていると、半分人生が破綻しているような人が多いんですよ。いや、失礼を承知で申し上げているんですが。まっとうな仕事を辞めて年収が 10 分の 1 になったとか、奥さんがいなくなっちゃったとか、恋人はクラブですとか。逆にいうと、そういう人でなければクラブを運営していっちゃいけないのかと。でも、これは非常に問題ではないかと思います。クラブを維持して大きくしていくことが幸せにならないというこの構造は。いまは過渡期だから仕方がないという話かもしれませんけど、ぼくは溝畑さんに話を伺っていて、溝畑さんにこそ幸せになって欲しいと思うわけなんですよ。

宮明：溝畑社長は、「人生いつ死んでも後悔なし」というのが、彼のポリシーなんです。ぼくがみていると、この人が死んじゃったらその後どうするんだろう、という不安がすごくあるんです。この人は後のことを考えているのかなと思うのですが、全然考えている気配がないんですね。本当に突き進むんですよ。ただ、あれだけ人脈を持たれている方なので、私個人の意見ですが、大分県知事になって欲しいなと思っています。知事になって、さらに底辺からスポーツを支えて欲しい。あれだけ人望がありますから、各政党も黙ってはいないと思うので、たぶん立候補すれば通ると思うんです。今の知事が二期目なので、三期ぐらいやったら、個人的には溝畑社長に出てもらいたいですね。

そうするとまたチームが違った形で強いサポートが付くかなと思っているんです。行政の力というのは、やはりでかいです。それがすべてではないんですけど、特に行政のトップの方の理解があるっているのは、すごく動きやすいし、やりやすいです。

宇都宮：ここだけの話、溝畑さんには、いずれＪリーグのチェアマンになって欲しいと思います。なぜかというと、先ほどぼくがＪリーグの第１世代、第２世代と申し上げましたけど、初代のチェアマンの川淵さんを除けば、第１世代のクラブ出身者が鈴木チェアマンで、今の鬼武さんが第２世代のチェアマンと考えています。そして今度は第３世代からのチェアマンがなって欲しいなと。なぜならば、Ｊリーグというものを全体から考えたときに、上から目線ではなく、下から目線でみられる人、なおかつ地方からの視点でみられる人、語れる人になって欲しいとすごく思いますね。胸スポンサーの問題もそうですし、秋冬開催の問題もそうですけど、すべて中央からしかものごとをみられていない、考えられていないというところから、地方切り捨てじゃないかという意見がたくさん出ている。逆に、地方に行かなければわからないことがたくさんあるんです。そういったことを考えると、溝畑さんにもっと頑張っていただきたいなと思います。

宮明:たしかにＪリーグの地方クラブでなにが苦しいのかといったら､経営なんですよね。やはり経営で、溝畑社長は大変苦しんでいるんですよ。ですから、この思いを伝えてもらうには、彼をはやく理事会のメンバーに入れてもらい、専務理事になり、チェアマンになってほしいと、私もすごく思っています。そういった方でないと、この閉塞感漂う状況から脱却できないという気がするんですよね。今の動きをみていると、こうした偏った人でないとダメじゃないでしょうか。溝畑社長は無茶苦茶しているようで、無茶苦茶していないです。頭の中は理論が通っていますし、繊細なところもありますしね。
これは笑い話になるんですけど、彼の携帯は５分に１度鳴るくらい電話の多い方なんです。彼が電話をかけるときに、ぼくはてっきりメモリーから探してかけているのかと思っていたのですが、全部相手の電話番号を頭の中で覚えていたんですね。何百人いたかわかりませんが、電話番号がすべて頭の中に入っていたんです。それがわかったのがつい数年前です。そのくらい彼は記憶力のいい方です。カンブリア宮殿をみられた方はよくわかると思いますが、変革するときにはああいう偏りの方が必要なのかなと思います。

中塚：ありがとうございます。今の携帯電話の話を聞いても、やはり異脳を持たれた方なのかという気もします。宮明さんが最後に言いましたけど、立ち上げ時期に必要な人材、それと宇都宮さんが言いましたけど、第２世代、第３世代になったときに、どう組織としてやっていくのかということが、課題としてあるのかなという気もしています。

□フロアーからの質問・意見

中塚：おそらくこのフロアーの中にも異脳を持った、そして人生をかけていろいろなこと

に関わっている方がおられ、しゃべりたくてたまらない方がいると思います。そこで、そろそろフロアーの方からの質問、もしくは意見、感想でも構いません。挙手の上、ご発言下さい。

●町田の構想

武井：武井と申します。町田の守屋さんにお伺いしたいのですが、遠い将来の話なのかもしれませんが、町田に駅近のスタジアムを作りたいなという話があったのですが、町田の周辺に駅近のスタジアムを作れそうな候補地のようなところはあるのでしょうか。また、そのときのスタジアムの規模、例えば鳥栖スタジアムやユアテックスタジアムというのがおそらく目標ではないのかなと思うのですが、その辺の構想をお聞かせいただけたらと思います。

守屋：市の企画で出している「将来の町田」というところでは、すでに駅近スタジアムというのが載っています。具体化できていませんが、町田の駅周辺には再開発の地域がありまして、３、４箇所候補地はあります。ただ、Ｊ２でやれる規模ということで、まだその話が具体的には出ていません。あともう１つは、10 年以内に小田急線が町田の方に通るようになるんです。そこで新駅ができるので、そこにはいっぱい土地があるので、それも１つですね。あと規模の話ですが、私の希望ですが、すごく大きなものはいらないと思います。２万人くらいのサッカー専用のスタジアムで、近くで応援ができる。そうした話を、市長ともしていまして、陸上トラックがあるとサッカーの楽しさは伝わらないのでサッカー専用のスタジアム。複合型というのがヨーロッパで流行っていますが、

サッカーだけで営業できませんから、駅近のスタジアムができれば、ホテルやコンサートができるようにする。一番に良いのは、市庁舎が駅前に移転しますから、そことくっつけばいいんですけど。ただ、それは計画が始まってしまっていて、それを変えるのは難しいのかなと思います。だけど、市長は非常に興味を持っていますね。うちは日本サッカー協会が出しているスタジアムのＤＶＤを市長にみせたら、すぐに翌日借りに来ました。だから、町田市の方もすぐというわけではありませんが、将来的には考えているはずですし、土地もあります。このようなところでよろしいでしょうか。

●「Ｊリーグ百年構想」にみえる矛盾点

本杉：本杉と申します。よろしくお願いします。まず宇都宮さんにご質問させていただきます。先ほどのお話の中で、上から目線（J リーグ）、下から目線（地方）、というお話がありました。今回のテーマが「地域からみたＪリーグ百年構想」ということですので、宇都宮さんが取材や研究をされたことの中で、「Ｊリーグ百年構想」にみえる矛盾点みたいなものがあれば教えていただきたいと思います。
それから、宮明さんと守屋さんには、ご自身が経験されてきたことから、「Ｊリーグ百年構想」に提案したいことがあれば教えていただきたいと思います。

宇都宮：矛盾点というと、なかなか難しいテーマだと思うのですが、１つ思うのは百年構想でよく言われるのは、それぞれの地域にスポーツを楽しむ施設があり、その地元にクラブがあり、それが何世代も続いていく、ということが大きくあると思うんですよね。それに照らして言うならば、何もすべてのクラブがＪリーグを目指す必要はないわけなんですよ。今日のプレゼンでは、たまたまＪリーグを目指すクラブを中心に話をさせていただきましたが、Ｊリーグを目指さないクラブがあっても全然ＯＫなわけなんですね。むしろそれまで数千万円規模の予算で回っていたものを、いきなり１億だ、10 億だと上積みしなければいけない理由なんてどこにもないわけです。例えば地域リーグの中で活動しつつ、あるいはＪＦＬの中で活動しつつ、その中で拠点を持って、地域密着、地域貢献をしながら、ちゃんと自前の競技場だったり練習場だったりを持っていて、それを市民に開放するような仕組みができていたら、Ｊリーグにこだわる必要は全くないわけなんです。ただ、Ｊリーグに行かなければダメなんだという風潮があるのは事実ですが。正直に言いますと、この取材を始めたころは、Ｊリーグを目指すクラブの方が取材対象として興味深いだろうなと考えていました。メディアもそれを求めているということがあったものですから、最初に地域リーグのクラブを取材するにあたって、Ｊリーグを目指すところからスタートしています。ただ、いろいろな事例をみながら取材をしているうちに、さっきも言いましたが、Ｊリーグを目指さなくても百年構想を実践できるクラブ、しようとしているクラブはかなりあるぞと考えるようになりました。むしろ、無理にＪリーグにこだわる必要はないんだなと。上を目指さないクラブの中にも、ちゃんとサポーターはいますし、ファンもいますし、地域に根ざしているところもあります。ですから、そういった層がもっと分厚くなっていって、自然と力が付いたから上に行こう、という流れができてくればいいのかなと思います。何が何でもＪっていうところから歪

みが来ている部分が、非常に多いと思います。矛盾というのは、だからそこの部分だと思っています。

中塚：今のテーマをもう少し掘り下げたいと思います。このシンポジウムの中で、このことをどこかで取り上げたいと考えていたのですが、いままさに宇都宮さんが言われた通りで、Ｊが目標ではなくてＪＦＬを維持する、あるいは関東リーグレベルでよい選手を育てるのが自分のクラブの目標なのだ、というのがあってもいいと思うんです。ただ、大分のような地方であったり、あるいは首都圏であっても町田のように、街の求心力が必要だという場合、求心力となるスローガンとしての「Ｊ」というのは、街の財であったり人を引きつけるための有効な手立てになっているのではないかと思います。そういう意味で、町田や大分における、これまでのサクセスストーリーの中での「Ｊ」の持つ意味を、それぞれコメントしていただきたいのですが。

宮明：先ほど宇都宮さんの方からもお話があったんですけど、スポーツをどう考えているのかということになってくると思うんですよ。スポーツに求められていることって何なんだろう。スポーツが街の中でどのような位置づけになるのか。私はお配りした資料の中に書いているんですけど、スポーツで街を変える、スポーツで人を幸せにするというのは、もう少し経済的な理由がいると思うんですよ。そう考えると、スポーツ界に流れる資金が少ないと思うんですよ。オリンピックも含めて全競技、あまりにも少なすぎる。法改正、税法を変えるとかして、例えば内部留保するよりスポーツ界に寄付した方が会社として得になるというような仕組みを作っていけば、もっと文化やスポーツにお金が流れてくると思うんですよね。そうするともっと施設だとかのハードに投資ができるようになるんです。そのように、法改正や税制改正をぜひＪリーグに考えてもらいたい、と考えているんです。そういうことができるような流れになれば、日本のスポーツは相当変わってくると思うんです。だけど、そういう動きは全くないんですよね。ですから、そういう動きも含めてやってほしいなと要望としてあります。

守屋：うまく話せるかわかりませんが、ぼくはずっと現場にいるからわかるんだけど、地域リーグとかその現場の人間の方が、百年構想を忠実にやろうとしているように、ぼくは感じています。なぜかといったら、ほかに売るものがないからです。ぼくのところなんかは、企業からお金をもらえるわけではないですし、もちろん強いわけでもない。そうしたら、最初に話したように、地域にとって自分たちがどれだけ価値のあるチームになっていけるか、ということだと思うんです。だから、百年構想というのは、地域リーグこそ実践しているのではないかなという気がしています。

Ｊリーグバブルのころ、ぼくは町田の行政に頼んで、あるチームのためにグラウンドを取りました。そしたら、翌日になったらやっぱり使わないと。ぼくは学校を休んで、来るファンに対して、某緑のチームの練習はなくなりました、と一生懸命頭を下げていました。これは本当に地域のことを思っているのかと、ぼくはそのときに強烈に思ったんですね。逆に、何もないぼくらだからこそやってやるんだという。逆に言えば、ぼくら

のようなバックのない人間たちがやっていることを、中央の人たちにみてほしいなと思いますし、本来Ｊリーグのチームは、上から言われているからやるのではなくて、自分たちの価値を高めるためにどんどんやっていくべきだと思っています。
あと、ぼくは宇都宮さんとだいたい同じような考え方です。でも、それは理想ですよね。やっぱり強ければ、大分じゃないけど、ファンも付いてくれると。でも、うちはＪじゃないけど応援したいという人が多ければいいと思います。関東リーグでも名を挙げれば、ＹＳＣＣというのはＮＰＯとしてすごく頑張っているし、運営をみても、雨の日でも一生懸命に下部組織の女の子がベンチを拭いているんですよね。そういうのをみていると、俺のクラブ、私のクラブとして応援しているわけで、そうした姿が本来あるべきＪの構想なのかなって感じています。理想はそういうことをやっていくべきだし、でもやはり強くあってほしいとも、うまくまとめられませんが思います。

中塚：ありがとうございます。では、他の方で質問がある方はいらっしゃいますか。

●医療現場からみたシンポジウムの感想

田中：静岡から来ました、田中と言います。ナビスコカップの決勝で大分に負けて、健太エスパルスはどうなのかと思いましたが、良いチームに負けたなと。過去にナビスコでヴェルディにやられたときには本当に悔しかったんですけど、選手たちがどう思っているかは知りませんが、今回に限っては爽やかな敗北と。ああいうチームが出てきて、今後浦和だとかガンバとかの常勝チームを倒すと、そういうのが活性化につながっていくのかなと考えています。
それはさておき、このシンポジウムでのぼくの感想なんですけど、ぼく自身は医者をやっていて医療の現場にいるんですね。それで、医療の現場に似ているなと感じたのは、地方の大分はすでにノウハウを持っているんですよね。東京に近い町田が目指そうとしている。医療界がまさにそうなんですよね。バブルの時期なんかは、聖路加病院だとか、海外の人たちが視察に来て、日本の医療は最先端の医療をやっていると言っていたのですが、かたや田舎では、杖をついてくるおばあちゃんがいるし、往診なんていうものもやっていたんです。それを支えていたのは国民皆保険というやつで、これを絶対に潰してはいけないですよ。この制度が潰れると医療の根幹、セーフティーネットがなくなっちゃうというときに、いま地方がどうなっているかと、手前味噌で申し訳ないのですが、自治医大の卒業生は必ず地方に行くんですね。そうすると、医者に成り立てのやつが一生懸命勉強するわけなんですよ。なぜかというと、３年目では実践として田舎に１人で行って、すぐに亡くなりそうなおばあちゃんだとか、どこかから転落した人の処置を委ねられるんですよね。そこにいたやつらが、ジェネラルフィジシャンと呼ばれていますけど、総合医をやった連中が田舎でそれぞれやっていると。10 年前まではそこそこ頑張ってね、というノリだったのが、これだけ医療が崩壊してくると、みんな立ち去り型のサボタージュ、大きな病院の先生は引き上げていますよね。あれは、やむを得ないところがあるんですよ。
医療界がこれからどんな方向に向かおうかとしていると、地方から学べじゃないですけ

ど、そのようなジェネラルフィジシャンのような人たちがある程度病院にプールされて、その人たちがまず診ると。その後スペシャリストと呼ばれる人のところを紹介すると。そうすると、大学病院も疲弊しないですし、中間にある病院も役割を果たすと。そして、ファーストコンタクトするような人たちは、そこでふるい分けができると。それがある意味地域の医療が成り立っているんですね。逆に都内なんかでも実践していかないと、よく救急車のたらい回し事件みたいなのがありますけど、そこだけ取り上げると負のイメージが多いと思うんですけど、じゃあその人たちが普段からかかりつけのお医者さんを作っておけばよかったんじゃないのか、というのがぼくらの本音なんですね。それと同じようなことが、いまは整備の段階でいいとは思うのですが、サッカーでも、Ｊリーグのシステムがこれからできて昇格条件ができて、それが一定化してくるとどこかで破綻がまたでてくると。例えばある日、大分の社長がいなくなっちゃったと。そしたら、誰もリーダーシップを取る人がいないからチーム崩壊ということになりかねないんですよね。だから、盤石な体制をチーム一丸となって、大分の場合はすでに大きな存在になっていますから、周りに与える影響も大きいと思うので、頑張って活性化してくると、日本らしいおもしろいサッカーが今後成熟してくるのではないかと思います。

中塚：ありがとうございます。医療もスポーツも生活に密着したところになければならないわけで、いろいろと関係してくるところがあるのではないかなと思います。

●ＪＦＬ以下の組織の運営のやり方

牛木：宇都宮さんに聞きたいのですが、地域決勝大会は過酷な大会だというお話がありましたけど、過酷ということよりも不合理な大会だというように思いました。それでは、それをどうすればいいのか。今後ＪＦＬ以下の組織の運営のやり方を、どうすればいいと宇都宮さんはお考えでしょうか。

宇都宮：ありがとうございます。非常に難しい問題でして、ぼく自身 2005 年からこの大会をずっとみてきて、やはり矛盾だとか、不合理だとかをずっと感じていました。ただ、まず考えなければいけないことは、この地域決勝という大会が、Ｊリーグを目指すチームのための大会ではない、という大前提です。つまり、それぞれの地域リーグを勝ち上がったアマチュアのチーム同士のチャンピオンシップなんですよ。その中で、さらに優秀な成績を収めると、ＪＦＬに昇格できる。つまり、全国リーグにいけるよ、と。まず基本はアマチュアチームの大会である。それ故に、過密な日程になるわけです。
まだアマチュアの大会であると考えると、この運営方法で仕方がないかな、とも思っているところがあります。単純な話、週末に試合を固めないと、ほとんどの選手が参加できませんから。むしろ、地域リーグとＪＦＬの差が激しすぎるというところに問題があるのではないかと、最近はそっちの方を考えるようになりました。どういうことかというと、ＪＦＬになるといきなり地域リーグから全国リーグに上がるわけですよね。すると予算の規模が一桁上がるわけです。それにＪＦＬでは、アウェーとなると、北は秋田から、南は沖縄まで行かなければならないのです。ぼくはＪＦＬを東西、もしくは南北

に分けて、その中で昇格降格を決め、併せて地域リーグのチームが行き来しやすいシステムを作れないだろうかと考えることがよくあります。
一方で、プロとアマチュアを分けちゃえという考え方もあると思うのですが、逆にぼくはＪＦＬのいろんな雑多なチーム、プロもあれば、アマチュアもあれば、企業チームもあれば、セカンドチームもあり、大学もある。このユニークな形態というのは、ＪＦＬの独自性として残しておくべきだと考えています。つまり、プロとアマチュアの垣根というのは、厳密に分けなくても良いのではないのかなと。どの海外のリーグでも、必ずプロアマ混在のカテゴリーというのがあるわけですから、日本の場合は３部でちょうど良いのではないかと。
ただ、地域リーグ決勝大会という過酷な大会に関しては、今回 16 チームになったりして、微妙に改革はされているんですけど、大きな改革というのは当分望めないのではないかなと。それよりも、ピラミッド全体のことを考えながら、考えていく必要があるんじゃないかなと思っています。

岩崎：岩崎と申します。ぼくも昨年地域リーグ決勝大会をみてきたわけなんですけど、宇都宮さんがおっしゃっていた地域リーグのままでもいいのではないか、上を目指す必要はないというのは理想だと思います。ただ、地方の場合、特に地域リーグでＪリーグを目指しているところというのは、それほどサッカーが人気なところではないと思うんですよね。そうなった場合、サッカー好きにとっては地域リーグでもいいんじゃないかということもあるとは思うのですが、今までサッカーをみたことがなかった人を呼び込む１つのきっかけとして、やはりＪリーグを目指すという看板はなかなか降ろせないのではないのかなと思います。
それで、私の勝手な妄想ですけど、上に上がる、あるいは上がらないというのを選択できるような、実際にＪＦＬでも HondaＦＣのようにＪＦＬにとどまるというクラブもあるので、そこの線引きをまずはっきりする。その上で、逆に将来Ｊリーグ入り目指しているようなチームであるならば、地域リーグの試合というのはいいところで７から８チームということで、あまりにも少なすぎて、これでは地域密着は難しいのではないかと。それを考えると、シーズンの前半は今まで通り地域リーグを行う、と。そして今度は将来Ｊリーグ入りを目指しているチーム、昇格したいと思っているチーム同士で、９地域あるから 18 チームを２つに分けてリーグ戦を行うと、ホームでの試合数がトータルで 16 くらいになってくると思うので、Ｊリーグを目指すチームにとってはいい練習というか準備になるのかなと、考えています。

●同県にある他のスポーツとの連携

岩崎：あと、日本の場合だと、サッカーがナンバーワンスポーツではないので、スポンサーを獲得するのであれば、例えば大分県であればｂｊリーグのチームがあったり、町田市の場合はフットサルのチームがあって、同じサッカークラブ同士が切磋琢磨するのもいいのですが、各県に違うプロスポーツがある場合にうまく連携しながら、財政基盤を安定させすることができないのかなとつねづね思っているわけです。その辺はいかがで

しょうか。

守屋：ゼルビアは古くから活動しており、フットサルのペスカドーラはホームタウンを求めてあとから来たということなんですけど、代表者の方といろいろと話をしますが、フットサルはペスカドーラで、普通のサッカーはゼルビアで盛り上げていきましょうという話をしています。ただ、今のところ一緒に何かやっていきましょうという話はないんですが、行政の方ではこの２チームを街のクラブとして応援していこうとなっています。正直にぶつかるようなところが出てくるのかとは思いますが、いまのところ営業の中で取り合いになったということはありません。少年団の子どもたちをみても、ペスカドーラの試合の前座で出たり、うちの方に来て試合前の大会に出たりしています。町田サッカー協会というのは、そういうところをコントロールしながらやっていますね。将来的には何か一緒にできることが出てくるのかなと思っていますけど、今のところ連携しているということはないですね。これは歴史の中でいろいろと変わってくることがあると思うのですが、今のところ新しい動きというのはありません。

宮明：大分は、全国リーグに出ているフットサルのバサジィ大分があって、ｂｊリーグも別府のバスケがありますし、バレーもプレミアリーグで大分三好ヴァイセアドラーというチームもトップチームにあります。トリニータと合わせて４クラブがトップリーグに参加しているんですよ。スポンサーに関しては、バッティングしているところもあります。そこはお互いに早い者勝ちという感じで、あとは手をつけない。それで、特にもめ事のようなことは起こっていません。
協力をして何かやろうという話は、無理にしてはないですね。ただ、シーズンの途中のこの３試合は「〇〇月間」ということにして、例えば別府のバスケボールチームと合わせて、サッカーの試合を見たらバスケの試合のチケットが何割引になるよ、とかそういったことをテスト的に何試合かやったことはあります。ただ、無理をして４クラブが連携して何かしようという動きはありません。

宇都宮：今同じ地域のライバルという別競技の話が、町田と大分からあったんですけど、長野県でいうと、よく知られているように、松本山雅が松本市にあり、長野市に長野パルセイロがある。ぼくはまだきちんと松本を取材していないのですが、非常に文化が違っていて、ライバル意識もすごく強い。長野県ダービーが盛り上がるという話は、非常に有名なんですけど、要は長野県のような大きな県であって、文化的にきちんと色分けされているのであれば、ぼくは２つ３つあってもいいとは思うんです。ただ、ここからは政治的な話になって、長野県協会としてはＪリーグを目指すクラブは１つでなければ困ると。要するに、先に上がったチームをサポートするのが自然な流れであろうというところで、松本が上がるのか、長野が上がるのかというところで、先に上がられたら断念しなければいけないというくらいの悲壮感を持ってやっているようです。似たような話は石川県にもありますし、岩手県にもあります。
ですので、別競技との共存というのもありますが、一方で地方に行くといろんな人間の

思惑が見え隠れし、独特の雰囲気がありまして、やっぱりＪリーグを目指すクラブが同じ県に２つあると、ごたごたしたものになるわけです。ただ、だからといって合併すればいいという話でもなく、これは今後に続いていく話なんだろうなと思っています。

□演者のコメント

中塚：予定の時間を超過しました。そろそろ締めたいと思います。ここまでの話を聞かれておわかりだと思いますけど、それぞれの地域ごとに、固有の歴史、地域の特性、そこにおけるサッカーの振興の度合いが違います。まっさらな状態から始めるのか、それともすでに根付いているところから始めるのかでも状況が違ってくるでしょう。そういう意味では、ゴールに至るプロセスは独自にあっていいのだろうなと思います。いずれにしても、始めなければ始まらない、また始めれば始まる、これも今回わかったのではないかと思います。
最後に演者の方から、一言ずつ全体を通してコメントをいただいて締めたいと思います。プレゼンの順序とは別で、宮明さんの方からお願いします。

宮明：去年の 10 月に学生を引率して東京に来たんですけど、こういったイベントに対してこれだけの人たちが集まってくれる、関心を持ってくれるっていうのはすごくいいなと思いました。例えば大分で今回のような文化的なイベントや会合をすると、そんなに人は来ないんですよね。これがどういうことかというと、たしかにトリニータは応援するけど、文化であるとかには、地方はまだ無頓着なんですよ。ですから、自分たちの街をスポーツを通してどう作っていこうかとか、そういったことに無関心な方がまだまだ多い。トリニータは応援すると、でもそれだけだという方がいるので、もっともっとこうしたイベントに人が集まるような大分にしていきたいと思っています。
本日はありがとうございました。

守屋：私はサロン 2002 というのをよく知らずに引き受けてしまって、しまったなと思いながら騙された気持ちでいるんですけど、こうやっていろんな地域で苦労していたり、先ほどお医者さんの話もありましたが、いろんな方の話を聞く中で、改めて私も地域に戻り、町田のいろんな問題を含め、またこれから先待ち受けているであろう、自分たちの目標も含め整理しながら、進んでいきたいなと。
それから、先ほどお話ししませんでしたが、町田というのは大変しがらみの多いところなんです。歴史があって、なかなか動きにくいところなんです。そういう中でも、もっと新しいものを作って、ごちゃごちゃ言うのは止めようよと、新しい流れを作ろうと思ってこういうことをしています。それが少しずつ形になってきていると思います。大分の話、宇都宮さんの話を伺いながら、本当に私たちの運動に携わる人たちと力を合わせて、また次に向かっていこうという元気が出ました。ありがとうございました。

宇都宮：今日は本当にこんなに多くの方に来ていただきありがたく思っております。「地域からみたＪリーグ百年構想」という地味なテーマにもかかわらず、これだけ多くの方にお越しいただいて、意外と思うと同時に大変嬉しく思いました。

いま、サッカー人気ということで考えますと、去年から雑誌がいくつも潰れているわけですね。私の仕事の場がかなり限られてきていて、本当に死活問題なんですよね。2006年のワールドカップの惨敗から、サッカーブームというのに翳りがみえ始めて、折からの出版不況に加えて、リーマンショックのトリプルパンチで、同業者の人と会うとため息しか出てこない。日本のサッカーにヒーローがなかなか出てこなくて、雑誌の表紙はいつも中澤ばかりだと。そういう中で、いろんなことを見つめ直さなければならないんだなと感じます。

その中で、先ほど守屋さんもおっしゃっていましたが、やっぱり元気になる源って何かと考えたときに、もちろん日本代表にも勝ってほしいし、ワールドカップに出てほしい、活躍してほしいということもありますが、やっぱり身近にあるサッカーもぼくらの元気の源なんじゃないのかなと強く感じています。そういったところから、地域のサッカー、地域のリーグを考えたときに、愛するクラブがトップリーグじゃなくても全然ＯＫだと思うし、むしろ下のカテゴリーにいるチームの選手なり、監督なり、フロントの方が人間関係の距離が近いんですよね。そういったところから得られる元気だったり、喜びだったり、悲しみがあると思います。これはサッカーに限った話ではないと思いますが、遠くのものを見つめつつも、身近なものを大切にするというのが、大事なことなんじゃないかなと。最近はそんなことをよく考えます。今日は本当にありがとうございました。

中塚：長時間にわたり皆さんどうもありがとうございました。最後に演者の方に大きな拍手をお願いします。